

にして持つてゐました。

海を渡つて行くと、そこは小さな島がありました。その國は刃物のない國で、島の人達は草は生えても、竹が伸びても切ることも出来ないで困つてゐました。竹が床の下から生えだして、敷物をつきぬけたりしても、この國の人達はそれを切ることを知りませんでした。

刃物をもつて来た次男は、屋敷の草を刈つてやつたり、床下から生えだしてゐる竹や木を切つてやつたりしましたので、島の人達は大へん喜んで、澤山のお金をこの男に與へました。

男は島を出るとき、その鎌を島に置きましたので、島の人達は又別に澤山のお金をやりました。

(福澤君)

三男の弟は兄達と別れると、又別な島を目あてに行きました。この島には時計のない國

で、時間を計ることが出来ないで困つてゐました。

三男坊のもつて渡つた鶏は、丁度朝の時を告げるのは無論のこと、晝御飯の時も、晩御飯のときも時をつくつて鳴きました。それでこの鶏が島にはいると、島では何の不自由もないで時を知ることが出来て、たいへん便利になりました。

島人は

「この鶏を買はせて下さい。」と云ひました。

三男坊は、慾のない人でしたから、「うちの國には鶏はいくらでもゐますから、あげませう」と云ひました。

「それでは代りにこの玉をあげます。」と云つて島の人達は美しい眞珠の玉をたくさん呉れました。三男坊はそれを買つて喜んで歸りました。

三島君

三人は、澤山のお金と、立派な寶物をもつて、家に歸つて落會ひました。



それから三人は心を合せて、幸福に暮らしたと云ふ。」

x

「あや、先生、美しい鳥ね、何といふ鳥ですの。」

「豎琴鳥（ライヤー・バード）と書いてあるじやないですか。」

「ライヤー・バード、バードは英語で鳥といふことでしたね。」

「さう。ライヤーは豎琴——ギリシヤのアポロの神の豎琴の形をしてゐるのでさう名がついてゐるのださうですよ。」

「随分美しい鳥ね。」

x

「これは何？」

「名は下に書いてある讀んでごらんなさう。」

「エンゼル・フィッシュ（かすざめ）。」

「まるで金魚のやうに美しいですね。」

「これは南洋の河の底の珊瑚の林の中に棲んでゐるので、こんなに美しく自然になつたのですよ。青い草の上にある雨蛙が青くなつてゐると同じですね。かうしてまわりの景色に動物の色がついてゐるのを、保護色といふのです。」

x

「これは、朝鮮の海金剛と云ふ、大へん景色のいい所……赭色の岩山……青い海……随分いい景色ですね。」

「行つて見たくなるね、先生！」

「さう……」

「あや、次に行きませうか。」

x

「あや、これは何？」



「これは、悪魔の塔と云つて、アメリカにある大岩山だ。」

「人はとても登れないね。悪魔だけが登るんでせう？」

「まるで、悪魔が立つてゐるようね。」

x

「おやおや、この尾の長い鶏！」

「何尺位あるてせう。」

「一丈四五尺から二丈近くあるつて書いてあるでせう。」

「じゃ学校の屋根にとまつてゐても尾は地面にひつつく位ね。」

「何處にこんな鶏があるの？」

「日本だけしかゐらないのだよ。土佐の篠原といふ所のをこれは寫したんだ。」

「次に行きますか……」

x

「これは海の底の寫真ですね。」

「さう、これはハーレーといふ大尉が深い海の底に下りて、とつた珍しい寫真だ。上の  
が長さ四呎、重さ四百ポンドといふ恐ろしく大きい（シヤコ貝）だ。」

「貝殻に足でもはさまれては大へんね。」

「この貝に足をはさまれて、死んだ潜水夫は何人あるか知れないさうだよ。」

「これは章魚と蟹との喧嘩ですね、先生！」

「さう。」

「どつちが勝つてせう。」

「おや蟹が章魚の足を缺ではさんてる。」

「僕は蟹が勝つと思ふ。」

「だつて、章魚が上に馬乗りになつてゐるから章魚が勝つと思ふ。」

「一概には言はれまいが、大體は章魚が蟹を足でまきつけて、一たまりもなくやつつけて



しまふ。私は子供の時よく章魚が蟹を食べてゐるところを見つけて、その章魚をとつたものです。」

「でも、脚をはさみ切られちや章魚も死ぬんぢやないの。」

「ところが章魚はそんなことは平氣なんだよ。足一本や二本かみさられて、間もなく又足が生えるんだからね。」

「それぢや、章魚は随分便利に出来てるのね。」

x

「これは奈良の大佛さんね。」

「見たことがあるかね。」

「はい、あります。」

「高さはいくらか知ってますか。」

「知らない。」

「五丈三尺五寸だよ。世界第一の大きな佛像なんだ。」

「こんな大きな像をどうして作つたんでせうか。」

「先づ土で佛像型の山を築き、それに粘土をぬつて細い所をうまく作り、その上に一寸位の蠟をぬり、その上に又粘土をかたく厚くぬつて、頭から蠟の間に、溶けた金を流し込むすると蠟がとけて、そこに金が固まり、そこに佛像が出来上るのだ。何分餘り大きいので八へんにわけて作つたんださうだ。」

「鼻の穴に人がはいれるつて、本當？」

「何でも、大きな菅笠がはいると云つてゐたから、人位は入れるでせうね。眉の長さが一間とか云つてゐたね。それから指の長さが、何間だつたつけ……」

x

「これはイタリーのピザの斜塔！」

「倒れかゝつてゐますね。」



「さう、初めからかう云ふ風に作ったのだとも云はれ、又、作る途中にかう云ふ風に傾いたのだとも云はれてゐる。何しろ、上の方は十四尺もかたむいてるさうだ。」

「石で作つてあるのね」

「さう大理石でつくつてある……」

「倒れたら大へんね……」

「ところで、決して倒れないといふことが、學問でちゃんと計算がしてあるので、その心配はない。學問といふものは有難いものだね。」

x

「次は印度のペラヘラ祭——」

「次はアフリカの班馬——班馬は上野動物園にもゐますね。」

「さう、随分たくさん飼つてるのね。」

「飼つてるのでなくて、野原にゐるんだよ。飼主のない班馬が野原にかうして群れをつく

つてゐるのだ。それから、この班馬は仲々耳がさとくて、近寄つて、寫真をとることがむづかしいのだ。人間の姿を見ると、すぐにとんで逃げてしまふといふからね。」

「じやこの寫真どうしてとつたの？」

「寫真に望遠鏡のレンズをつけてとるのだよ。」

「班馬の後にゐるのは何？」

「身體は馬のやうで、角があるんでせう。グヌスと云ふ奇妙な動物なんだ。」

x

「これは北極のオーロラ。夕暮になるとこんな光が西の空に見える。電氣の作用ださうだね。日本の北海道でも出たことがあるさうだ。」

x

「これは鶴ですね。鶴が随分たくさんゐるんですね。先生。」

「何處にゐるんですか。こんなにさくたん。」



「これは山口縣の八代村の鶴の群れだ。」

「山口縣は俺の國だよ。俺の國はえらいだらう。」

「又、豊島君がいばりだした。」「ハハ、ハハ、ハハ。」

×

「これは世界で一ばん高い山、エベレスト山だ。」

「エベレストの寫眞は今月の〇〇雑誌に出てゐますよ。色のついたのが。」

「ぢやそれをもつて來て貰はうか。」

「これだよ。随分美しいでせう。これは……」

「さうね……」

「ところで、このエベレストのてつべんにはまだ一人も登つた人がないんだ。何しろ日中は暑くて百五度位の温度に昇ると思ふと、夜は又馬鹿に寒くなつて、零下五十六度位にまで下るといふのだからね。……」

「どれ位高さがあるの？」

「二萬七千尺……」

「富士山よりどれ位高いの？」

「あれを二つもつて來て、つき合せたよりは、まだ高いんだ。」

×

「これは、いつか話した火雲星、これはそれをよこから見たところ……」

×

「これは世界第一の火山——阿蘇山だ。」

「志垣先生の國の熊本にあるんだね。」

「さう、何時か志垣先生が（山んやけ彌三郎）の話をしてくれたとき、この山の話があつたね。」

「山んやけ彌三郎、やさがちんくやきつた。」



「山んやけ、彌三郎、やさがちんくやまつた。」

(一同大聲で合唱したす)

x

「これは月の表面の寫眞。」

「これは大鬼蓮」

「これはロンドンの霧……」

「この間、東京でも随分霧がひどかつたですね。」

「ロンドンの霧はあれなんぞとはくらべものにならぬほどひどいさうだ。一度霧がこむと日中でも夜のやうに眞暗くなつて、とても歩くこと出来ない位なんださうだからね。それこの寫眞にぼつと明るいのは灯をともししてゐるところだ。」

「これは石油坑の火事……」

x

「おやくこの大男！」

「おやくこちらには大女。」

「まあびつくりするね。」

「これは世界第一の丈の高い男で、亞米利加のハーアセン君。高さが八呎九吋日本の九尺あるんだね。……こちら世界第一の大男で、同じく米國のバックストーン君といふ百姓の人……丈が六尺六寸、體の重さが八十一貫二百匁と來てる。」

「女の方は？」

「これは世界第一の大女フォルトン嬢、アメリカのリング曲馬團の花形女優で、體重が八十二貫二百匁……さきの男よりも一貫目重いんですね。これはロンドンデイログネール嬢、伯爵夫人で年が十八、背の高さ七尺五寸六分……さきの男よりは少しひくい。」

x

「これは印度のラムナガー寺院——お寺なんです。」



「随分高いね、數へて見よう。」

「一階、二階三階四階五階六階七階八……九……十……」

……四十九……四十九階よ、おやおや……」

「亞米利加のニウヨークのウルオーズは何階だったかね。」

「あれは五十八階だったね。」……」

## 二 讀方難教材の取扱

「今日は君達には少しむづかしいと思はれる文章を研究しようと思ふがやれるか。」

「やれるとも。」

「どんな文章ですか。先生。」

「じゃ、黒板に書いて行くから、皆で讀んで見て下さい。」

○  
エジプトの文明は、ナイル河の流域から初まります。試みに地圖をひろげて見て下さい。エジプトはアフリカの東北部にあつて、その大部分は沙漠です。面積はおよそ我が國の十倍その間を南の方から北に流れて、曲りかねつて地中海に注いでゐるのが、即ちナイル河です。

この河は不思議な河で、毎年六月の末から、きまつて大洪水を起します。上流に大雨が降り続くからです。そして九月の末になるとまたきまつて水がひいてしまふ。その後には何時も非常に肥えた土壤をのこして行きます。其處に種子を蒔けば殆ど肥料なんかやらなくても宜しい。穀物はひとりてに、すん／＼成長して行きます。農業にはもつて来いです。で、エジプト人はみんな、この河を尊敬して神様のやうに考へてゐた。毎年、大水の出る時になると、盛んなお祭をしたと云ひます。日本などとはずる／＼違ひますネ。

エジプト人はこの河が、毎年きまつた時期に氾濫することから思ひついて、始めて曆といふものを作つた。今年洪水があつてからもう一週大水が出るまでの間を、一年といふことにしたのでした。一年を三百六十五日に分けることも知つてゐました。また幾何學といふ面白い學問があります。皆さんが中學へ這入ると教はりますが、これもやはりエジプト人が始めたものです。ナイル河が氾濫して、沙漠や島をすつかりあらひ流してしまふもので、どこが誰の地面だったか、さつぱり見當がつかなくなる。それを公平に、もう一週分けなほすために、三角を書いたり、直線を引いたりしたのが、幾何學のそも／＼のはじまりだといふことです。



私「どうです。むつかしいだらう。」

A「それでもないよ。大體はわかる。」

私「さう、それは偉いね、では、一遍皆によんで貰つて分らない文字に線を引かう。」

一同、読み初める。たどくしいが、大體に讀める。そして、次の文字の側に赤い線を引く。

流域。洪水。土壤。穀物。尊敬。沍濫。曆。幾何學

私「さう、大てい讀めてしまつたね。大體のわけは分つたでせう。何のことが書いてありますか。」

M「エジプトの文明のことです。」

I「ナイル河のことです。」

私「さう、大體はそんなことが書いてあるね。では、分らない文字を調べて見ようか。先づ流域ですな。(流)の字は分るでせう。」

兒童「ながれるですよ。」

私「讀みかへは？」

兒童「知りません。」

私「流ながれるは流ながるとよみ、下の(域)の字はゐきとよみ、二字で(流域ながるゝ)と讀む。域といふ字は、場所、くぎりといふ意味の字で、(流れてゐる所)といふ意味ですな。次の(洪水)をしらべませう。この字は「たいどう」云ふ意味の字らしいですか。」

N「(……)を起します。上流に大雨がつどくからです。そして九月の末になると又きまつて水がひいてしまふ。——と書いてあるから、大水のことでせう。」

T「僕もさうだと思ひます。」

私「そうです。よく氣がついたね。大水のことを何か外の言葉で云つてゐるのを聞いたことないかね。」

I「あゝ、分つた。分つた。コウズイつて云ひますよ。」



私「さうです。(洪水)はコウズイとよむのです。ちや、この字も分りました。次の文字に行かう。(土壤)この字の上の字は何ですか。」

兒童「土です。」

私「読み替へは？」

I「土曜日どの土どです」

私「さう、では上の字は分りました。下の(壤)字はやつぱり、つちと云ふ字で、読みはジャウ、それで二字で土壤どじやうとよむ。土のことですね。では、次の字に移りませう。どんな意味の字と思ひますか。」

T「田や畑の作り物でせう。」

私「さう、こくもつ(穀物)と読んで、稻や麥や豆や粟などの意味です。次の字は？」

A「(尊)はたつとぶといふ字ですね」

私「さう、(敬)はうやまふと云ふ字で、二字でそんけいと讀む。ここではエヂプト人が

ナイル河を神様のやうに尊く思ふですね。何故そんなに尊く思ふのでせう。」

兒童「それりや、前に書いてあるやうに、肥料になる土をのこしてくるからですよ。」

私「さうです。では次……むつかしい字ですね。これは、はんらんと讀むのですね。」

N「大水があばれることとせう。」

私「さう。その通りです。はんらんは大水が出ることですね。じゃ次！ この(曆)字は日に關係した字ですよ。その邊の文をもう一度読みかえてごらん。」

兒童一同、読みかへす。仲々分らない。

私「ちや云はうか。」

兒童「いつちや、いけません。」

兒童「日數、でもないやうだし……」

兒童「日取、でもないやうだし……」

T「あゝ分つた。こよみぢやないの、先生！」



私「さう、よく當てましたね。暦ですよ。暦はよく知つてゐますね。」

N「家には柱ごよみがありますよ。」

私「さう柱ごよみは柱にかける暦だから、さう名がついてゐるのですね。さあ、あと一つになつたね。これはむつかしいから私が云はう。(きかがく)と読んで一つの學問の名なんです。この間野口君が『三角形(正)を四つに分けてごらん』と云ふ問題を出してゐましたね。あれなど幾何學の問題で、君達も幾何をもうやつてるわけだ。いろんな圓や三角や線などを書いて、頭をねる學問だ。君達も中學に行つたら、この幾何學をどつさり教へて貰ふのだね。」

O「先生、ここでも少し教へておくれよ。」

私「さう、やすいのをあとで教へてあげようね。さあこれで皆讀めた。もう一べん初めから讀んで見て下さい。今度は意味がはつきり分つて来る。」

兒童一同讀む。

私「讀めましたか。わけはよく分つたでせう。」

兒童「分ります。」

私「ではまだ題をつけてゐませんから、題をつけて下さい。」

H「僕は(エチプトナイル河)とつけたいね。」

M「僕は(幾何學と暦)だしたいね。」

T「僕は(ナイル河)としたいね。エチプトと斷わらなくとも、ナイル河で分ると思ふから……。」

O「(幾何學と暦)でもよいけれど、(暦と幾何學)の方が口調もいいし、それに暦の方が初めに書いてあるから上にした方がいいじやないか。」

私「さう私だつたら河の名をとるだつたら、(ナイル河)だけにしたい。それから暦と幾何學の名をとるだつたら(暦と幾何學)としたいね。そのわけはT君と、O君の云つたやうに、ナイル河はエチプトだけしかない河だから、殊更エチプトナイルと斷る必要はない



と思ふし、曆と幾何學は、曆の方が初めに書いてあるから、上に書きたいと思ふね。それに讀んでもその方が口調がいいしね。だがここでは曆と幾何學の外に穀物のことなんかも書いてあるし、(ナイル河)としてまとめてしまつた方がよいぢやないか。」

兒童「それがよいと思ひます。」

私「ぢや、研究はこれ位でよさうか。今日の文は大へんむつかしいやうでしたね。あとでむつかしい文字を書取して覚えて置いて下さい。」

○「僕は覚えてしまつたから書取はいや、エヂプトの地圖をかくよ。」  
私「さう、それも面白いと思ふね。」

### 三 兒童の生活劇について

生活劇——そんな名辭があるかないかは知らない。しかし私は兒童の世界から、兒童の生活そのものとして生れる兒童の劇——それを私は兒童の生活劇と呼びたい。それは正し

く兒童の眞實な生活であり而して兒童の劇だからである。この場合、學校劇とか兒童劇とか云ふよりも、兒童の生活劇といつた方が私にはより應はしく思はれる。あまりに劇そのものが、兒童の純眞な生活そのものであることを認めるからである。

「兒童の村」小學校は、自由にすべてを解放してゐるだけに、さうした私の所謂生活劇を兒童達は思ひきり實演する。それは勿論、脚本なんかもつてゐよう筈はない。すべて準備といつたやうなものは殆どないのである。舞台なども野外にとることもあるし、室内にとることもある。いや時には舞台をとると云ふよりも、野外や室内情調から來る舞台的氣分に暗示されて、劇的情緒が醗酵さるゝ場合もある。醗酵された劇的情調は全く無豫定にぐんぐん流れ進む。丁度人知れぬ曠野をつき進んでそこに珍奇なもの不思議なものを探り求めるやうな冒險心——そんなものも働いてゐる。そしてぐんぐん未踏の劇的世界を突き進んでゆく。それだけ兒童は眞摯であり、熱心であり、而して興味的である。かくして兒童の心が流れ進むところに波瀾が生じ、葛藤が生れ、劇としての面白味が表はれて來る。時



に豊かな想像の世界が天祿的に閃めくこともある。時に新鮮潑瀾たる創作工夫が表はるゝこともある。そして生氣の充溢した生活劇の一幕が實演さるゝのである。

だから生活劇に於て脚本と劇術とが同時に誕生するわけだ。戯曲作者即劇術者であり、劇術者即戯曲作者である。

劇の始源は、原始人が動物の動作を模倣して表現したところにあるとも云はれてゐる。恐らく上述したやうな児童の生活劇に近いものであつたであらう。それが進化して戯曲作者と劇術者とに分れるやうになつたものと思ふ。云ふまでもなく観せることを主體とする大人の劇に於てはかくあらねばその劇的效果を充分上げることが出来ないであらう。しかし観せることを必ずしも必要としない教育的立場に於ける児童の劇に於ては戯曲作者と劇術者とを分かつ必要はない。むしろ両者が渾一融合するところに價值があるやうにも思はれる。

小學校の児童達がいつまでも、原始人がなしたやうな素朴な劇演に満足してゐることも

考へものであるが、進歩した演劇に到達するまでの過程として、かうしたものを演じさせることは意義あることであらねばならぬ。かうした境地を完全に經過してこそ眞に高貴な演劇を創作し、鑑賞することが出来るのだとも考へられる。

児童が生活劇を實演する場合、なるべくは教師もその登場人物となつて劇演するがよい。子供達は教師と共に實演することをどれほど喜び、どれほど勇むことか。而して教師の動作がいろんな方面によき暗示となつて、その劇的效果を著しく高めるのである。

次にかゝげるのは、我が校二の組の児童達の劇演したもので、極めて單純素朴なものであるが生活劇として可なり面白いものと思ふ。私もこの登場人物になつてゐるのである。私は實演の折のあの潑瀾たる氣分をとでも表現し得ないのを憾むが、兎に角次に大體の様子だけでも書いて見よう。

### ○天狗のお父さん

晝のお休みに、私は一人草原の隅つこの花柏の木の下にあぐらをかいて座つてゐました。



そこに三の組の小野さん、恵子ちゃん、まことさん、玲子さん、森田君などが、私を見つけて走りよつて来ました。

「先生、遊びませう。」小野さんが云ひました。私は「先生ぢやない。俺は天狗だぞ！」と銅羅聲で云ひました。そして鼻の上に拳を二つ重ねて天狗の恰好をして見せました。

「ぢや天狗の小父さん、天狗の子にしておくれよ。」恵子ちゃん達がにこにこして云ひました。

「皆が天狗の子になりたいのかい。天狗になりたいものは手をあげろ。」

「ハイ、私になりたいよ。」

「ハイ、私もよ。」

「僕もなりたいよ。」

「天狗になるにはね。まづ、この草の實を食べるんだね。さうすると鼻がすんずん高くなるんだ……」私はそこにあつた鐵道草の蕾を草の實に擬してさう云ひました。

「一つおくれよ。」

「僕にも。」私にも。」

「じやみんなに一つ宛つあげよう。食べてごらん！」

皆はむしやむしやとその鐵道草の蕾を食べるまねをしました。

「そうれ！ 鼻が長くなる……そうれ、そうれ……」

「おやおや長くなる長くなる。」子供達は鼻の長くなる様子を手つきで表情しました。

「うまく鼻が延びた。今度は羽の番だ。羽は天狗のフレンチを食べれば直ぐに生えるんだ。それそれフレンチをあげやう。」私はそこにあつたこみかん草の羽状複葉をむしつて渡しました。こみかん草の羽状複葉の裏にはフレンチ形の小さな果實がついてゐましたから……

子供達はそれを貰つて又食べる様子をしました。

「おやおや羽が生えた……」

「私のはあなたのより大きな羽よ……」



両手を羽の形にして、パタパタ羽ばたきをしました。

「これでみんな天狗になったんだ。これからは思ふ所へ飛び廻ることが出来るんだ。世界見物に出かけやうじゃないか。」

「私アメリカに行くよ。」

「さう、それは面白い。あなたは？」

「私はアフリカよ。」

「あなたは？」

「私は九州よ！」

「ぢやもう出かけますか、出かけるまへに天狗のお守りをあげませう。」私は鐵道草の葉をおまもり一枚づつあたへました。

「一、二、三！」

私は手をうちました。天狗の子供は両手の羽をパタパタさせて思ふ方に立つてゆきまし

た。しばらくすると皆は又かへつて来ました。

「天狗のお父さん！ かへりましたよ。」

「只今……」

「只今……」

皆はかえつて来ました。

「何か面白い事でもあつたかね？」

「アメリカでウールオーズを見て来ましたよ。」

「五十八階の大きな高い家だらう。」

「さう。自動車がこんなになつてすうすう通つてましたよ。」目をくるくるさせて、恵子ちやんが話します。天狗の子の恵子ちやんはアメリカ見物で鼻汗をかいてゐました。恵子ちやんは久しく米國にゐた子供なのでした。

「小野天狗さんは、どこを見たの？」



「あたいたアフリカだつたのよ。」

「アフリカでは何を見たの？」

「蛇や象やしま馬や……そんな動物を見たの。これが象の牙でも土産にもつて来たのよ。」  
さう云つて木の片を小野さんは出すのでした。

「それはいい土産、どうもありがたう。」

「ちや玲子天狗ちゃんはどこを見て来たの？」

「私、水のない國に行つたの……それはそれは人間も木の草も干からびてゐたのよ。」

「ちやお父さん、今度はみんなで水のない國に行つて見ようではありませんか。」皆は、

「行かう」行かう」と云つて賛成しました。

水のない國の人間に峯岸君豊島君達がなりました。

天狗の親と子供は、水を瓶に入れて水のない國に出かけました。

「あやあや鼻の高い人達だ。」水のない國の人々は小さくなつてふるへてゐました。

「いいものをもつて来たんだよ。私達は親切な人よ。」

皆はさう云つて羽ばたきしながら降りて行きました。

「いいものつて何？」

「水といふおいしいものよ。それごらん。」

「なるほどな……」

「「たいたこの國の人は何んなもの食べてるの？」

「土ばかり食べてるのだよ。」

「じゃ、うんこは土のうんこね。」

「うん。」

「あしつこは。」

「おしつこは水がないから出ないのよ。」

「あもしろい國ね。」天狗の子は顔見合せてうれしそうに云ひ合ひました。



「まあ、この水をのんでごらんさい。」

「水つてどんなもの。」

「おいしいともさ……」

水のない國の人達は、水の瓶を貰つて、呑む様子をしました。

「おや！ これは何と云ふ、おいしいものだ！」

「おいしいだらう！」

「もつと呑んでごらん。」

「胸がすつとして來た。あまりおいしくて躍りたくなつたよ。」

やがて水のない國の人々は草原で奇妙なおどりをしました。天狗の子供達も、その群にはいつておどりだしました。躍つて了ふと、今度は天狗の子供達は、

「サイダーの國に行かう。」と云ひだしました。

皆は、サイダーの川、サイダーの湖、サイダーの瀧を目の前に描いてゐるのです。

### 第三編 高學年の國語生活學習



## 第一 高學年に於ける國語學習の傾向

### 一 聽方學習の傾向の變化

尋五六頃に入ると思想も餘程大人びて来る。したがつて、從來童話など貪るやうに求めてゐた子供達は稍々もすれば童話などを子供らしきものとして、あまり興味をもたなくなるやうな傾向を見ることがある。これは無論正しい考ではないが、過渡期にある子供としてはさうした傾向は許されなければならぬし、又教師としてはさうした傾向を利用して、聽方學習の範圍を擴張するやうしなければならぬ。例へば童話なども、武者小路氏の「花咲爺」や「地藏と鬼」の如き思想的のものや、アンデルセンの「母」の如き幽玄なもの等やゝ程度の高いものを選択して提供するのがよいと思ふ。それから材料を擴張して小説を擇んだり、藝術史の如きものを取つたり、生活實話の程度の高いのをとつたりするのがよい、小説としてはユーゴーの「ラ・ミゼラブル」や武者小路氏の「幸福者」菊地寛氏の「蘭



學事始」等の如きもの、外國のものとしては、ストリンドベルヒの「母の愛」、その外トル  
ストイのもの等さがして見れば子供にも分るいいものがいくらもあらうと思ふ。

藝術史としては「ニール河畔の草」などはこの頃の子供の聽方材料としていいものであ  
る。

## 二 讀方全盛時代

文字を一通り覚えて來ると、彼等は讀物をむさぼり初める。丁度四眠起きた春蠶が桑の  
若葉をむさぼり食ふやうに、子供は讀みものを貪る。この時代には手あたり次第にいろん  
なものを讀む、文字を通して色々な奇異な世界が心の中に映じて來るのは、正しく子供に  
とつては驚異であらう。新聞を讀む、雑誌を讀む、小説をよむ、歴史を讀む、地理を讀む  
天文學に興味をもつ、礦物學に手をつける。果ては分りもしないと思はれる「徒々草」や  
「西遊記」などの國文學の本に指を初める。でも、この時こそ讀書の黄金時代だ。うんと  
讀ませてやるがよい。記憶力も確かだし、理解力も相當進んでゐるから、この時こそ、ウ

ンと力がつく。ウンと讀ませてやれた。

## 三 話方の傾向

やつぱり話方でも多少變化する。童話や生活實話がこれまでの話方の大部分を彩つてゐ  
たものが、この頃になると、研究物なんかを發表したがる。「火の話」「牛の話」と云つたや  
うな理解的なものがよく表はれる。不思議な外國の地理事情なども話したりする。童話が  
少なくなつても方面が變つたわけで、やつぱり奇異なもの、ローマンチックなもの等、童話  
的分子は濃厚なやうである。

この外、思索的なものゝ發表もあらはれる。物事についての思索的な態度の芽ぐみかゝ  
つた時かも知れない。

この頃、注意しなければならぬことは、ともすると發表を忌避する傾向のあらはれるこ  
とである。これは羞恥心の芽ぐんで來たことによるのかも知れない。しかしこの場合教師  
は押しつけがましい態度にて、はいけなと思ふ。それよりも、生活を豊富にするやう指



導すべきである。生活が豊富になつて居れば、そんな羞耻心などは突破してしまふ。自然のまゝに流れさせてやりたい。

#### 四 綴方の黄金時代

讀方聽方等によつて、語彙が豊富になり、生活が充實して來ると、綴方に於ける發表力はぐんぐん旺盛になる。話方に於て内に籠る傾向の子供も綴方ではどんどん發表するといつたやうなこともあらはれる。日記などもこの頃になると丹念につける。時に小説など書いたりする。旅行などすると、随分と長い旅行記を丹念にまとめる。お友達との文通なども盛にやる。殊に話方に興味を失つた子供なんかは綴方でウンと發表して自分の鬱積した力を發散する。讀書と相待つて綴方はこの頃黄金時代に入る。

#### 第二 高學年の讀方補充教材について

私は小學高學年に於て、理科的の讀物なり、地理的讀物なり、實業的讀物なり……さう

した科學的讀物を要求する傾向、それから新聞雜誌を要求する傾向——つまり社會的讀物を要求する傾向と云はうか……とにかくさうした傾向が著しく増加して來ることを前に述べた。それで、それに對する教師側の用意についてここでは述べて見たいと思ふ。

さて、國定讀本に於ても、この科學要求に添ふべく、いろいろな教材が準備されてゐる試みに尋六の教科書を開いて見ても直ぐに見當る。「太陽」「人と火」「曆の話」「電氣の世の中」「ゴム」「十和田湖」「北海道」等の教材が準備されてゐる。これはまことに當を得たことと思ふ。

しかしその準備された教材の悉くが吾人の意を得たものであらうか。私をもつてすれば多少の不満がある。

一たいに國定教科書に於ける科學的讀物は、知識をお盛澤山にもり立てゝゐるやうである。例へば前掲の「太陽」にしても、「人と火」にしても、「ゴム」にしても「十和田湖」にしてもさうである。一例をあげて見るならば、小學國語本卷十二ゴムなどがそれであらう。



## ○ゴム

自動車、自轉車のタイヤ、ゴママリ、ゴム人形、消しゴム、ゴム靴、ゴム管、ゴム風船など、数へてみるとゴムで造つたものは實に多い。一體ゴムは何からどうして造るのであらうか。

ゴムは、熱帯地方に産する或植物からとる白色の液を原料として、製造したものである。此の液の取れる木を普通にゴムの木といつてゐる。これには種類が多く、一番よいのはパラゴムといふのである。今日世界におけるゴムの大部分は、此の木から取つたものである。此の種のゴムが昔主として南米ブラジルのパラ州から産出したので、パラゴムの名が生じたわけである。

ブラジル邊でゴムを製造するには、山野に自生するゴムの木から原料をとるのであるが、近年ゴムの需要が激増したために、英國人ばマレイ半島の領地にパラゴムの木を移植するに至つた。他の國人も之にならつて、南洋におけるゴムの栽培は頗る盛になつた。南洋は一年中温度が高く、雨量が多いので、ゴムの木の發育には最もよく適してゐる。マレイ半島、蘭領東印度等には、日本人の經營してゐるゴム園もたくさんにある。

此の邊でゴムを栽培するには、先づ森林を焼拂つて、其のあとに種をまくか、又は苗木を植付けるのであるがこれが成長して、切付を行ふまでには五六年もかかる。其の間草をとつたり、虎や象の荒しに來るのを防いだり苦心はなか／＼一通りでない。切付といふのは、ゴムの木から液をとるために、木の幹に小刀で傷をつけることいふのである。切付には餘程熟練を要する。元來ゴム液は、幹の皮部と木質部との間にある乳管組織といふ所から出るのであるから、此の組織の所まで小刀が届いて、しかもそれより深くは傷のつかないやうにしなければならぬ。此の傷から出て來るゴム液は流れて下のコツプにたまるのである。

ゴム園の人は毎朝暗いうちに起きて、受持の木に此の切付をして廻る。それがすむと、今度はバケツを持つて

コツプにたまつた液を集めて歩くのである。集めた液は之を工場に持つて行き、先づこして不純な物を取除き次に薬品を入れて固まらせ、機械で薄くして乾かすのである。

こゝまでが原産地における仕事である。かうして出來たゴムは、各國の工場に運んで加硫法を行ふ。加硫法とは、ゴムに硫黄をまぜる事で、かうするとゴムが非常に弾力を増して來る。之をそれ／＼用途に應じて、更に加工するのである。

電氣の機械や、蓄音機の圓盤などに用ひるエポナイトといふものもゴムから造る。從來床の敷物や、道路にもゴムを用ひることが行はれて來た。

ゴムの用途は、年を追うて益々廣くなるばかりである。

この文を見るに、次のやうな智識が盛り込められてゐる。

- 一、ゴムは何からとるか
- 二、ゴムの木
- 三、ゴムを採取する土地
- 四、ゴム栽培法
- 五、ゴム液の採取
- 六、加硫法
- 七、ゴム製法
- 八、ゴム使用の前途



僅か五頁の中にこれだけの智識を盛り込むとするので、そこにいろいろ無理が生ずるのである。一たい編纂者の側からの考としては、一つの材料に就て、記述する場合かうしてその材料に關する總ての知識を網羅しなければ、その材料に對する一つの纏つた智識を與へることは出来ないと言ふ考から來てゐるのである。

しかしかうした立場で作られた作品は、創作の動機の上に生命がない。生命のないといふのはそこに器械的製作の方法が多分に加はるからである。生命が緊張して働らくとき、智識の總てを網羅することよりも、偏して。しかも一つのものに深く突入する。そこに統一せられた、生命が光る。器械的製作はすべてが網羅せられて完全な相になつてゐるが生命の力は稀薄だ。編纂者は先づ子供に教へるために、いろいろな智識を豫め羅列する。そしてその中の殆ど總てを網羅して書き上げるのである。色々な智識を網羅するから、其の智識は間口だけ浅く覗いたぎりで次の智識に移らなければならぬ。

記述は浅く一般的に素通りしななければならぬことになる。個々の素材に深みがないか

ら素材相互の關係といふやうなことも深く繋がることが出来ないと云つた風で、文の生命力は勢ひ稀薄になり勝になる。生命の稀薄な作品は讀者に強固な智識を與へることは無論出来る筈がない。

勿論かうした完全な素材を網羅した記述法も必要であらう。理科書や地理書の記述法は主としてこの記述法をとつてゐる。しかし、それは讀方としては、さう云ふ記述法もあるといふことだけ知らせて置けばよい。そのモデルを一二あげるに止まればよい。

それで大體は、理科的教材にしろ、地理的教材にしろ私はもう少し生命の漲溢した作品をかゝげたい。生命の漲溢した作品とは、作者の全生命がはち切つて、いろいろな素材を完全に統一したもの、謂である。随つて作品に盛られた智識そのものから考へると、其のすべては網羅せられてはゐないが、少くとも、主題の個性があらはれてゐる。個性が表はれてゐるといふことは、そのものの生活が表はれてゐるといふことである。智識は網羅するだけでは生活はあらはれない。



次に「富士山」といふ、一つの理科的教材をかゝげて見たい。いかに、富士山の生活が表現され、而も、その個性、生命が鮮明にあらはれてゐるか。私はこの種のことを科學的教材にも多くとりたいたのである。

### ○富士山

今から約十萬年も前のことであるが、當時駿河灣は今よりもなほ深く北方に入り込んでゐて、富士の北の御坂の山の裾が直に太平洋から押し寄せる沿波に洗はれてゐた時代があつた。

その時駿河灣の中程の海底に大噴火が始まつて、遂に一つの火山島が出来上がった。

この出来た島が即ち今の愛鷹山で、あだかも鹿兒島灣内における櫻島の如き状態をなしてゐたのである。

愛鷹山が出来てから、やゝ後れてその西北の灣内の一點から、またまた大噴火が起つて、忽ちにして一大火山が水面上に盛り上がり、同時に灣の北部は陸地に化してしまつた。これがそも／＼富士山の濫觴である。

この噴火は恐らく數百年も続いたであらう。噴火した岩層が積もりつまつて、ほどその高さは一萬一千何百尺かの圓錐形の山となつた。

そして噴火の勢ひが少しく下火となつたころに燒岩がどろ／＼中央の火口から四方に流れ出して、それまでに築き上げられた圓錐形の岩層山をつゞんでしまつた。

これと同時に大噴火は幕を閉ぢ、今われわれの見てゐる如き形の富士山が出来上がったのである。それから後にも同様の時々破裂をして、灰を降らしたり燒岩を流したりしたことは、何百回あつたか、何千回

あつたか數知れず、明瞭に史上に記載された破裂だけでも二十餘回に及んでゐる。

富士山よりも前に駿河灣内に噴き出した愛鷹山は、その内部の組立てから見ると、富士山と全く同一形式に属するもので形も構造も正しく富士の兄弟山である。

たゞこの山は富士山よりも何百年か何千年かの年長であるだけに、既に頭が禿げ、上部の形ちがこぼれてしまつた。

即ち富士とおなじやうに初めは燒け岩の皮が岩層の上を掩うてゐたのであつたが、その燒け岩の皮が頭の方から取れはじめ、今では心の岩層が外に現れその上方が風雨の浸蝕に逢つて數個の尖峰に分かれた、結果少年時代の美しい圓錐形は、影も形も失せてしまつたのである。

富士山は弟ながら兄よりも體は大きく立派にそだち、兄よりも一層容姿端麗であるが、移ろい易きは世の習ひ今後いつまでその端麗なる容姿を保ち得るか、その鑑は隣りの愛鷹山にありといはれねばならぬ。

實際、危ふく形ちの毀れんとした近い例は、今より二百二十八年前、寶永四年の破裂にある。

寶永四年は日本の大厄年で、その年十月四日に東海、東山、南海、西海の諸道に亘り、南日本を震撼した稀有の大地震があつてからまだ五十日も経たない十一月二十二日から二月初めにかけて、富士山が大いに活動したのである。

この破裂のため、八合目の御殿場、須走に向いた側面に大穴が出来、その穴から噴き出した岩層が穴の下方の抜け跡の一隅に横たはつて、孤立した丘のやうに下から見ゆるやうになつたのが、即ち寶永山である。

この破裂は富士の全形を破壊せず、大事が小事で済んだのは、誠に幸ひであつた。

若しこの破裂が頂上の火口の周邊にでも起つたならば、富士の美容は著しく破壊されたことであつたらう。富士は圓錐火山の標本として、火山學上にもその名をうたはれてゐる。



富士形といふ形容詞が日本にあるやうに一種特有の美形を備へ「頭の切れた圓錐形」などといふ學問上の形容詞は富士の美形をけがすもまた甚だしいものである。

その美形の由つて来た原因の一つは前にも述べた通り、山體の大部分が焼岩の流れで固まつたものでなく焼岩がくだけて噴出された大小の岩屑から成つてゐるといふ點にあることはいふまでもない。

併しただそれだけでは、あの「そり」を打つた何とも形容の出来ない麗はしい曲線美は發達しない筈である。その曲線美の發現には風化水蝕の兩作用が大いに與かつてゐる。

風化、水蝕の兩作用は山の中腹以下よりも、中腹以上におほく行はれ、これに反して風化物の堆積は、中腹以上の部分におほく行はれる。

かくして上部の傾斜はますます急に、下部の傾斜はますます緩となり、この兩作用が圓錐の周圍に一樣に行はれた結果あの曲線美が出て来たのである。

併し遠目で見た曲線美も、實際山に登つて見ると、その表面の崎嶇凹凸の甚だしいのに驚くのである。遠目が綺麗だけに、その驚きが一層深刻であることは、一度登山したもの、皆一樣に體驗する所である。

富士山は火山としてまだ若い方ではあるが、何分その成人してから既に數萬年を経るゐるので、その間には圓錐形の周圍に當然發達すべき放射谷が四方に發達して、かなりの深谷を作つた。西方の大澤谷の如きは最も大なるものである。

これ等の放射谷に焼岩表面の磊々たる凹凸も加はつて登山は可なり困難であるが、ただ須走方面には寶永噴火の際におびたゞしく噴出した赤黒い火山灰砂（ラヒリー）が一面に厚く山腹に堆積して焼岩をうめてゐるから、下山の時その上をすべりながら下るのが誠に痛快である。

富士の砂走りといふのがこれである。

一體大火山には形の複雑したものがおほい。淺間、箱根、天城、阿蘇など皆その例であるが、富士山はその高さにおいてわが國第一の大火山でありながら火山としては最も簡單な形をなしてゐる。

これは火山活動の中心が富士ではたゞ中央の一點にかぎられて他に移動しなかつたことと、噴火の活動がただ一幕だけで終りを告げ他の大火山のおほくがなしたやうに、中幕も大詰もなかつたことと、この二つの理由に歸せねばならぬ。

しかし富士山は年がまだ若いから、これから死ぬまでに、どんな活動を仕出かすが、それは保證のかぎりではない。

富士山の頂上には活動の中心點となつた火口がまだ存在してゐる。それは俗に内院と稱して直徑三百五十間深さ百間ばかりの掬鉢形の大穴である。

下から見ると頂上が一文字になつてゐるのは、火口壁といつて、火口の縁が見えるのである。

併し上にのぼつて見ると、この火口壁は下から一文字に見える程平ではない。かなりはげしい凸凹がある。

その凸凹の高い所を北から東南西といふ順にかぞへると、釋迦ヶ岳、久須志岳、伊豆岳、成就岳、駒ヶ岳、淺間岳、三島岳、劍ヶ峰の八峰となる。

文人が富士山を形容して八采の芙蓉峰といふのはこれから來てゐる。

西端の劍ヶ峰は、富士山の最高點であると同時に日本内地の最高點で、海拔三七七八メートル、即ち一萬二千四百六十七尺四寸に達してゐるのである。

劍ヶ峰の北から一條の深い水無谷が眞直に西に向つて走り、長さ三里に及んでゐる。

これが前に述べた大澤で、富士放射谷の最大なるものである。

富士山の曲線美の綺麗に發達してゐるのは、屢々述べた通り、火山體を構成する岩層熔岩が中央の大火口から



噴出して四方に散布し、流出した爲でなければならぬ。  
併し仔細に山體を調べて見ると、中央大火山の外にも數多の小火口があつて、それ等の小火口から岩屑や熔岩を噴出して四圍の山腹に幾多の瘤を作つてゐる。

この瘤のやうな小火山を寄生火山といひ平林博士に従ふとその數全體で卅九に及んでゐる。  
卅九といふと、可なり多い様であるが、イタリーのシシリ島のエトナ火山には二百四十五の寄生火山が知られてゐる。

富士山の寄生火山は母體にくらべるとその大きさが遙に小さいのと、その多くが中腰の森林帶中に隠れてゐるのとて、さほど目立たぬのは、富士のため寧ろ仕合せであつたともいへる。  
寄生火山の中で一番大きなのは、北側の大室山で、高さ一千二百卅八尺に及び、親に似た綺麗な圓錐形をなしてゐる。

精進湖の上あたりから見ると、最もよく見える。

御殿場登山道に接近し、且その位置が寶永噴火の燒野原の中に立つてゐるので、最もよく登山者の目に觸れるのは、二塚と赤塚の二寄生火山である。

これ等の寄生火山は、元來母體火山の活動の際に、母體に大小の「ひび」が入り、その「ひび」から熔岩やガスが噴出して生れ出たものである。

が、その「ひび」に二通りの區別があつて一は中央火山から四方に放射狀に走り、二は中央火山の周邊に同心狀に走つてゐる。

徒つて寄生火山の排列にも、放射狀と同心狀の區別がある。(東京日日新聞)

富士山の位置、成因、高さ、形狀、土質と云つたやうなものが所謂順序正しき記述にはなつてゐないが、しかし生命に統一せられた富士山の生活が渾然として表現されてゐるのではないか、もう一つ例をあげよう。

### ○隠戸の瀬戸

安藝の岡隠戸の瀬戸といふ海あり。此所は國の南の山邊に突出で、六七里海上に出たり。其山の陸地に連る所甚だ細ければ、海へ出たる所程を、山をほり穿て切通して、舟のかよう海路を新に造りしなり。其所人力を以て切明たりし事なれば、兩方の岸せまりて、其間の潮行甚急にして、舟人の恐るゝ所なり。何人の切通せし事にやと尋ねるにむかし平清盛安藝守にて此國に居給ひし時、舟にて毎度往來に此所に至り、出崎の山にさへられて、遙の南の方へ廻り十里餘も海路遠くなれば、此處を通り給ふ度毎にいかりて、此出崎の山を切通し、舟を眞直に運るべしと下知し給ふ。人皆其事は人力の及ぶ所にあらざるべしと恐れしかども、清盛の下知やみがたくて、數萬人の力を以て、終に陸路に連る所を斷切て、舟の通ふ海を造りなせり。其後は數百年の後も、その思をかうむりて、上り下りの舟路近く行く事を得るなりとぞ。余兵庫に遊びし時、築島を見て清盛の志の大にして豪邁なる事を感じ驚きしが、又此事を聞て、一世に威をふるひ給ひしも、其故なきにあらざりしとその世の事までも思ひやりし。又蘇州の陸地を通りし時、其大道のつくりやうを見るに、他の國とは違ひて多くは眞直に作りたり。元來山國なれば、直には附がたき道を、山に登り、谷に下りて、無理に近道を作りなせり。余かれて閑居しは、日本の道路は、其始大かた行其菩薩の差圖なりしといふ事なりしが、いづれの國の道も、山あれば其路を通りまは



して谷つたひ行き、なるたけは山地を登り下らず、平坦の所をかよふ様に附たるもの也。高州に成ては、まはり道なく、大方直に行やうに、山谷も厭はず登り下りて道を附たり、他の國の道をひらく心とは格別のやうに思ゆれば、これかならず平相國清盛の改め給ひしか、又ちかき頃の福島正則か、何れ豪雄の氣象の人のなす事なるべしとおもひしが、其後此瀬戸の瀬戸の事を聞て、彼陸地も平相國の手なるべしと思ひし。(橋南翁西遊記)

これは、地理的材料といふべきものと思はれるが、音戸が瀬戸の位置、幅員第二を通過する船舶の統計なんかは一々出てはいないが、そこには生命に統一せられた、音戸の瀬戸の生活が渾然として表現せられてゐるのではないか。

總ての智識を教材の上に、網羅しないことは、一方に兒童に學習の餘地を残して置いてゐることになる。生命に感激が湧き一方學習の餘地を残して置けば、そこに當然、新しい學習活動を促進することにもなる。「音戸の瀬戸」の作品について感激することが出来ればその位置を地圖で調べ、幅員を研究すると云ふやうな學習は強ひられた形でなく、自發的に起るにちがひない。次に、前にも述べたやうに、高學年兒童になると、社會的讀物を要求し、アップトゥデートの智識を要求するに及ばず、教科書に於ては、さうした教材

が少い。それに對しては新聞を教材とすることがいいと思ふ。

新聞を教材とするについて、色々な論が行はれてゐるやうだ。即ち兒童に適する題材のみ切りぬいて讀ますがよいとか、或はこんなことをする必要はなく、新聞其儘の形でそのまま全部提供すればよいとかいふ論である。私は寧ろ後者に與するものである。

新聞を切り抜いて兒童に提供するといふ考へは、恐らく新聞には随分醜惡な事實の暴露されてゐる部分が多く、それ等は兒童には悪影響を與へるものであるから、それをそのまま提供するのは危険だとする論據に立つのであらう。成程新聞には窃盜あり、詐偽あり、戀愛あり、あらゆる社會の實相を恰も鏡が物を映するやうに、善惡、美醜すべての部面ありのまゝに記載してゐる。しかしそこに新聞の存在理由があるのではあるまいか。

新聞に表はれてゐる善美の方面のみ見せつけて、惡の一面を見せないことは、子供を温室育ち、坊ちやん育ちにしてしまふことになると思ふ。醜惡な記事を提供したからとて、それを模倣すると思ふのは、早計ではあるまいか。惡や醜に對する正しい判断もその記事



を提供することによつて行はるゝではないか、又一般に悪や醜とされてゐる事柄も、よくその心持の中に立ち入つて見ると、同情すべき事情も發見することが出来るのではあるまいか。そうした正しい判断や同情をもつといふことは人間としては大切なことであらねばならぬ。

又、戀愛問題に觸れしめることは、子供の下等な性慾を挑發するものであるといふ風に解して一概に忌避するのもどうかと思ふ。

私の經驗するところでは、新聞を提供したとしても、兒童達は戀愛問題などに關しては、案外無關心であるやうである。それはまだあまりに現在の生活とかけはれてゐる世界であるが爲めかも知れない。しかし假令さう云ふ問題によつかつて、それを問題としたとしても、それに對して正しい判断をなすことが出来れば却つて仕合な事ではないか。いつかは人間は戀愛問題によつかるのだ。さう云ふ問題によつかつて、正しい訓練を経てゐることは、その人のためにどれだけ幸福であるか分らない。

それで私は、大體新聞はそのまゝの形で提供したい。

しかし、新聞にも随分やくざな記事はある。これは勿論窃盜や詐偽の三面記事が全部やくざな記事だ云ふのでもなく、又所謂美蹟善行の記事がやくざでないと云ふのでもなく、やくざであるかないかと云ふことは、そんな形の上からは判断出来ないことだ。その記事の持ち含んでゐる内容の價值から判断すべきことである。

それはとにかく、何としてもやくざな記事に無暗に時間を多くとるのは惜しいと思ふ。それで、さうした無駄な時間を省くために、赤い圈點をつけたり、切り抜いたりして、兒童に提供するの悪くないと思ふ。

兎に角、新聞記事には、アツブトレードの智識があり、社會の活現象がすべてに亘つて記載せられるから、教科書の缺陷を補ふものとしていいものだと思ふ。私の關係してゐる「鑑賞文選」と云ふ雑誌は、毎月、新聞室なるものを設けて、新聞記事を兒童化して、提供してゐる。これはいい企劃だと思ふ。私も依頼されて、時折書いてゐる。私が尋四以



上五六年生に對して書いたものを一二紹介しよう。

### ○皇后陛下の御養蠶

皇后陛下が宮中紅葉山でおそだての春蠶はめでたく上簇して、うつくしい繭になりました。この繭は、東京府下西ヶ原東京高等蠶絲學校にお云ひつけになり、絹糸につむがせられ、京都高等工藝學校で羽二重、その他のおり物となることになってゐます。そしてそれらの織物は聖上陛下の御衣としておつくりあそばすともれうけたははつてゐます。

### ○少年騎手

東京牛込區愛日小學校六年生武田正名は、毎日馬のほひをかゝなければ気がすまぬほどの馬好きで、朝の四時から起きて、士官學校の馬場で乗馬の練習をしてゐるさうです。今では先生の遊佐少佐も舌をまくほど馬術が上手になつて、去る三月習志野の乗馬大會でも大人にまぢつて一等をとつて、ついで國府臺の乗馬大會でも一等をとつたといふことです。

### ○マラリヤ病

沖縄縣で八重山郡では八つの村にひどいマラリヤ病がはやつて、そのために三十年間一人の赤ちやんも生れず、そのために死にたへた家もすぶふんあるさうです。それで大正十一年から國費を一萬圓ばかり出して、この病をたやさうとつとめてゐる。そのため今年は赤ちやんが二十三人生れ、縣では大喜びださうです。

### ○栃木山

東京大がまふの横綱、栃木山はすまふをやめることになりました。栃木山は栃木縣に生まれ、十六歳のとき三十貫の大石をかついださうです。大正六年大關になつて以來ほとんど勝ちつとけて來たのです。

### ○日本一の年より

兩陛下の銀婚式の當日、日本國中の年よりをおしらべになり、九十歳以上の年よりはお杯と御金とをたまはりました。九十歳以上の人は一萬八千人あり、その中百十歳以上の人は十三人ありました。その中でも富山縣の高見ナカといふ人が一ばんの年よりで百十四歳でした。

### ○アイヌの優等生

北海道日高國平取村アイヌ鍋澤次男君といふ十三の少年は、こんど京都帝國大學戸田博士にその秀才をみとめられ、京都の小學校の六年生として勉強することになりました。アイヌ人は今頃一萬五千人ばかりになつてゐまして、これからも次第に人がへつて行く様子が見えてゐるのであります。

私たちはアイヌの中からこんな少年の出たのはうれしいことと思ひます。どうかりつばな人になつてアイヌのためにつくしてくれるやうのります。

### ○子供を助ける

神奈川県海賀町の海岸一丈ばかりのがけの上から、六つになる子供が海の中へおちました。



ちやうどその時、近くでつりをしてゐた小學校五年生川島清次郎君は、ゆうかんにも海の中にとびこんでその子供をたすけあげました。

また、東京芝区百代橋の上から、九つになる子供がおちて助けをもとめてゐるのを、芝区南海小學校三年生吉川禮二郎君服部治憲君の二人が見つけ、すぐさま着物をぬぎ橋下につけつけ、古川君が繩をなげて水の中の子供につかませ、服部君は吉川のこしをしつかりおさへて、力を合せて岸へまで、ひきよせつひに助けあげたのでした。

### ○めづらしい茸

福島縣女子師範學校の齋藤知賢といふ先生は、數年前から茸のことをおしらへになつてゐましたが、今度珍しい茸を見いだされたので、それを世界の「茸の先生」と云はれてゐるアメリカのロイドといふ人の所に送つて見てもらはれましたところ、それ世界でまだ見だされてゐない珍らしい茸であつたのでした。それでその一はコバードン・ファッシュクラタム、他の一つはボソホルス、サイトウと名づけられました。

次に掲げるものは新聞から、面白いと思つた材料をとつたのである。

### ○變つた名前

▲神田小川町には行方不明といふ男名があります、どうしてこんな名前をつけたのかと交番のお巡りさんが聞きに行つたそうです。

▲九州の宇佐入幡宮の近くに姓が大野で長男が一（はじめと續む）次男が一（す、む）三男一（しるす）四男〇（まどか）長女を「（まかれ）と呼ぶ五人兄弟があります、奇抜ではありませんか。

▲福島縣の小高町には「道中内右馬之丞」群馬縣渡瀨村には「相場金何僧」赤坂區青山高樹町には「貝吹赤太郎」茨城縣眞壁町には近藤松嶽初、日本橋の北島町には長田十二月三十一日、長田が姓十二月三十一日を（ヒズメ）と讀む人があります、この人は大みそかに生れたといふことです。

▲静岡縣の富士郡タカチカ村には「吉野放題」といふ人があります。まだ四十四の男盛りですが、この方の父親が生れる子も生れる子も病弱なのに氣を腐らし今度生れるときには死に放題生き放題の「放題」をとつて名にしてやらうと、とうとうこんな名をつけてしまつたんだそうです、そのせいかこの放題さんは非常に丈夫で今は四五人の父親として生れてから藥を口にしたことのないのが自慢です。

▲もう一つ静岡縣の十八公三千丈といふ官吏があります。十八公が姓で三千丈が名でミチダケと讀むんださうです。

▲大塚の相澤生さんからの御寄書——同氏の郷里に清水子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥太郎——あゝくたびれる——こんな活動のヒルムのやうな長い名があるそうです、お父さんがつむじまがりて、月籍係と名前の争ひから「おれの子におれが何とつけやうが勝手だ」と怒りの發するがまゝに無我夢中でこんな名前をつけて了ひ、さすがに後に至つて呼び悪くなり通稱十二支太郎と呼んでゐるさうです。こんな親をもつた子供は可哀さうです。

▲下谷中徒町のある質屋に末成他人といふ店員が居ります、漢文讀にしたら随分面白いでしょう。

▲麴町五丁目には太田代、清太郎盛といふ人があります、福井縣足羽郡には平平平平、福岡縣八女郡には平平平といふ人があります、いづれも中年の男です。

▲東京通信局の某課に「本名志氣延」さんといふ美しいマイピストが居ります、姓の本名もおかしいが、志氣延



といふ名前も随分珍しいでせう、同じ逓信局に「保保保」といふ人が勤めておりました。給仕達がよくボツボツボツといつたつらしておいたものです。

▲金澤市の南町に太鼓を製造してゐる「一二三四五六七八九十郎」といふ人がゐます。一二三四五六が姓で七八九十郎が名だそうです、牛込の北町に「山中孤狸吉」といふ人がゐります、あまり奇抜な名前なので何かのマジナイになるとかいつて表札が毎日のやうに紛失するそうです。

▲広島縣のアシナ郡宜山村に「三反畑八反田」といふ人がゐります、三反畑が姓で、八反田が名です。この八反田さんが生れたとき、父親の田地が八反歩あつたさうです。大きくなつて道樂を覚えてもこの八反田だけは人手に渡らぬやうにとかくつけたさうです。

▲神田のカジ町は鍛冶といふ人がゐります、鍛が姓で「キダ」治が「オサム」と讀むんださうです、福島伊達郡長岡村に「若月蒼生之助」といふ人がゐります、廿五歳の今日まではじめて出會つた人で自分の名を満足に讀み得た人はまだ一人もないといつてゐます、そのはずで、何しろ「タミノスケ」と讀むんですから……

▲大阪の北區に米屋のせがれて「左甚五郎」といふ當年十歳の少年がゐります、甚五郎君「大きくなつたら大工になるんだ」といつてゐます、また赤坂に住んでゐる一労働者のむすこに「椎名平九郎正純」といつて大層強そうな名前がゐります、この子が生れたとき父親が曲垣平九郎の講談本を讀んでゐたので、すぐさま平九郎正純とつけてしまつたんださうです。

▲市外大森町新井宿一に東京ガス電氣の技師で「田中案山子」といふ人が住んでゐます、近所の子供が「タナカノカカシ」と悪口をいつて通ります、淺草の千束町に洋ガサの柄を製造してゐる「大豆生田明苗」といふ方がゐります、大豆生田が姓で明苗が名です、豆屋の作つた時でも讀むやうな氣がする。

▲淺草新福井町に鹿兒島縣人「玉那成長龜子」といふ人がゐります、參謀本部に石橋鬼千與といふ砲兵大尉が

ゐます、名札が電除けになるとかで、この方の表札も毎朝紛失してゐるさうです、何んでも千葉縣中山の鬼子母神の申し兒といふ話です。

▲千葉縣千葉市千葉町は千葉千藤といふ名士がゐります、茨城縣土浦在で、駐在所の巡查が一人の馬子と呼び止めました、手帳を出して姓名をきくと、馬子君はほかぶりなときながら「吉太郎左衛門三郎右衛門」と答へました。お巡りさん赤眞に怒つて「この馬鹿者が、何て人の名まで……」とビシヤリやりました、今度は馬子君が承知しません「名前を申し立てたのに何で打つた、」とついに大立まはりになりました、ようやく仲裁が入つて荷馬車の鐵札を見たとお巡りさん頭をかいて「イヤ悪かつた許してくれ」といふのが今も附近の一つの話です、この馬子の姓は「吉」といふのです。

▲福岡縣の耳納山の山ろくに「中野東郷平八郎」といふ若者がゐます中野が姓で東郷平八郎が名です。父親が、東郷大將を神様の如くうやまつてるところから、ツイこんな名をつけてしまつたので、役場の戸籍係が別段悪いといふわけではないが、せめて東郷だけはとつて、ただ平八郎としたらどうだ」と懇々としたが、本人はどうしても承知しなかつたさうです。

▲埼玉縣北埼玉郡東村に「奈良自由造」といふ人がゐます。この父親がこぶる變り者で明治十五年自由黨の總理板垣退助氏が岐阜公園で凶漢相原某のために遭難のせつ那「板垣死すとも自由は死せず」と豪語したその言葉が氣にいつて我子に「自由造」とつけ板垣伯のやうな大政治家たらしめやうとしたが、十九歳の時海軍を志願してはしこから落ち負傷して今は郷里に引こもつてゐます。

▲千葉縣滑川町に「松田日曜」といふ報知新聞の愛讀者がゐます。我子に「報知」とついで大得意です、高岡舟町に「井波渡歌」といふ子供が居ります。東宮殿下御渡歌の日に生れたからださうです、名古屋市東區車道町に「早川鮎之助」といふ人がゐります、この人はまだ生れてから鮎を見たことがありません。



▲神奈川縣都築郡二俣川村に「八橋」が姓で、長男を「↓」二男を「↑」といふ兄弟が居ります、友達が「君の名は簡單でいなあ」といふそうですが、本人になつて見ると、すこぶる書きにくいそうです、本所區の米屋さんで「八十八、八十八」といふ人が居ります重ねて書くと米の字が二つ出来るので本人大層な自慢です。  
▲秋田市の歩兵第十七聯隊第十一中隊長に大正三年頃「井上大鬼智」といふ大尉殿が居りました。名前に似ず女のやうにやさしい人でした。山形縣米澤市に「飲酒孟權造」といふ機業家が居ります、「散酒孟」姓で（イサハイ）と讀むのです。

▲新潟縣南魚沼郡六日町字下新田に「大馬カメ」といふ娘さんが居ります續けて讀むと随分おかしい。また同町字大月に「若井クソ」といふ婦人が居ります。役場の戸籍係が「クメ」を「クソ」と書きちがへ、こんな珍名をつくつてしまつたんだそうです。

▲名古屋市電の監督に「堀鯉鮎太」といふ人が居ります「堀」が姓で「鯉鮎太」が名で「フリタ」と讀みます、岩手縣二戸郡田山村に「木登」「猿松」「野馬鹿」といふ變つた名前が居ります。また青森運輸事務所管内に驛長をしてゐる人で「淵澤某殿」といふ人が居ります、この弟は「私二男」と申して盛岡機關車の職工をしてゐます。

▲福岡縣八幡中學の三年に「本田（姓）主馬之介正國」といふ學生が居ります。本郷龍岡町廿四に「大熊豹虎猪」といふ動物園のやうな表札が居ります。

▲會津若松市の榮町に耳鼻科の院長さんで「新田四郎」だの筋向ふに疊屋で「本村重成」といふ人が居ります。丸ビルのエレベーターボーイに「島田三郎」といふ少年が居ります。下の關警察の警部で「正月十五日」といふ人が居りました。

▲元山形縣南置賜郡壽記に「天保八文」といふ人が居りました、天保が姓でアマモツ、八文が名でヤツプミと讀みんださうです、函館市新川町に「古川三斗九升五合」といふ人が居ります、三斗九升五合を（シトナイ）と讀みました。

ます、福島縣會津郡坂下にマモコの元賣捌をしてゐる「渡邊七五三吉五郎次郎三郎雷門」といふ人が居ります。

（報知新聞）

次に掲げるものは世相の一面を表はしたもので、子供の好みさうなものである。

○おしんこ

此所は深川の或る場末、屋臺を前に密柑箱の壊れたやつに腰を下して、朝顔、鳩ボツボ、帆船船……何でも指先き一つで餘念なく拵へて居る。藝術家が力作に従事してゐる時と異ならぬ一念凝つた眞摯な態度が見える。此しんこや君の態度を藝術的良心の發動と書いては書き過ぎるであらうか。

然し、床屋さんが客の頭髪を刈る時、二三人の人が待つて居ても仲々サツには刈らぬ。自分が横から眺め縦から見直して或程度の満足を感じなければ承知せぬ。技に一寸商賣を離れた良心が動くのである。

だから、しんこ屋にも同じ良心のあるのを認めて藝術的良心と言つて見たのだ。帆船船や飛行機などを一生懸命で造つて居る時には、集まつて来た子供達を顧みず仕事を續ける風がある。

腕白小僧達が鼻き合つて「おじさん俺らに鳩ボツボ、僕にや一錢のお船だ、早くお呉れよ」とせつく聲を聞いた上で、やおら「我お華客の来よ」と云つた態度で向き直る。此大道藝術家は元は埼玉縣で相當に暮して居た男。

「廿五の歳に東京で米屋を開きました。十七人も雇人を置く迄に溜付けるとアノ震災で全滅でサーボツとした揚句、何の氣もなしにしんこやを志しました、今でも何故なつたか自分で判りません、年は四十九アト一年で天命を知るともんでサ。ハハハッ、姓は大隈です、同じ大隈でもねヘツヘツヘツ」  
仲々に達観してゐる「私ほしんこまいですが、木場には腕のいいのが居ます。私なんざあ日に二兩二分が關の山



ですが木場の先生はそんな事じやきませんよ」と云ふ昔下谷にしんこやの名人が居て、其男の造つた鳩は鳴くと云ふ噂まで傳はつた、大隈君の飛行機が飛び出しさうになるまでには仲々長年月を要する事であらう。

(時事新報)

かうした材料はいくらもあるのであるから、教師は、常に新聞紙に目を通して児童に提供するやうしたいと思ふ。私の學校では高學年生は讀賣新聞などとして見てゐる。

次に私が高學年補充教材として入れたいものに、郷土的題材を記述した文章がある。國定教科書の讀本にはどこにも郷土的色彩がない。

郷土的材料を讀本の補充材料として採擇する所以は、郷土に對する理解と愛とを深かめそれによつて人間の高い人類愛、自然讚頌の心持を育くまうとするものである。乃至は郷土材料を提供することは、材料が卑近なだけに内容の理解も容易であり、したがつて國語學習の上にも効果の多いものであることを認める。

私は、鳥取師範附屬時代にこの點に着眼し、私の主宰した子供雜誌「小鳥」には毎號この郷土的讀物を満載して、児童に提供したのであつた。郷土的材料として讀本に掲ぐべきものには、或は郷土傳説もあらう、郷土紀行もあらう。郷土風景もあらう。或は郷土地誌もあらう。或は郷土の人達のものした作品を掲げるもよからう。次にその「小鳥」にかゝげた郷土讀物をかゝげて見よう。

### ○若松鑛山

若松鑛山はクロム鐵鑛を多量に産出するので、近頃有名になつた鑛山である。産額から云つても東洋一ださうである。この鑛山の發見せられたのはまだ新しいことで、或鐵道のお役人が日野川の鐵橋工事に従事してゐるとき河原で偶然に一箇のクロム鐵鑛を拾ひ、この山奥に屹度クロム鐵が産出するにちがいないと思ひ、それをいらく探し、遂にこの若松鑛山を發見するに至つたのださうである。(著者記)

若松山に登ることは、此の學校の毎年の行事の一つだ。登山口の橋上に集會所を定めて出發したのは、田植も終りかけの六月であつた。

はじめ先づ目をひいたのは鑛石運搬であつた。鑛石を入れた袋が滑車によつて針金をすべつて出る音のものが、それを上手にはづして袋からうつす人夫の早業、見てゐても氣持がよい。そこには既にうづ高く鑛石が積まれてゐる。

橋上あたりからは愈々登山道である。爪先上りにいくつかのうねを越えて横手に着くまではなかく苦しかった。服は汗でびつしよりだ。松蟬の聲は脂までしぼる様だ。

横手から若松鑛山は真正面に見える。あそここに採掘場が一目に見え、その中ほどには事務所も見え。事



務所を自あてに各を渡り、細い坂路を上り曲つて事務所についたのは十時過ぎであつた。事務所の人たちに迎へられて、しばらく休んだ。山中の事務所は立派な建物ではないが何となく氣持がよい。満山に咲き亂れたつつじの眺めは又格別だ。「夏はすてきに涼しいですよ。」是非その頃遊びに入らして下さい。その代り冬ときたらお話になりませんねえ。」と、

主任の竹内さんは快活な調子で愛想よく話される。そしてクロームについて色々のお話を下さつた。そのお話によると、クローム鐵礦の役に立つのはクロームで、そのクロームは重に耐火煉瓦に使はれる。昔はクロームの分折を外國でしてゐたが今は神戸でやる様になつた。若松からは年々數千噸産出してゐるので、我國重要鐵山の中にはいつてゐる。クロームの産出状態はボケツト式で機械岩や蛇紋岩の間に含まれて出るのが普通で、野組の鐵山の様に礫岩の間から出る事は世界にも例がない。探掘したものは選礦場で選礦するのださうだ。それから一同は二組に分れて探掘場や選礦場を視察させていた。鐵夫がタガネで鐵石に穴を掘り込んで爆發する様子を見たり、カンテラをとめて暗い坑道を通つたりして後、やがて選礦場を下りた。しちべ革のまはるにつれて色々な機械が運轉する響は物すごい。一番上には碎鐵機があつて、そこでは大きな岩が丁度栗おこしでもたべる様にかみ碎かれる。碎かれたものは水と共に順次下方へ流れて行く、下には大きな鐵の石臼の様な機械があつて愈々こまかく粉の様につぶしてしまふ。つぶされた粉は三臺の洗ひ臺の上へ流れて行く。洗ひ臺は左右に動いてゐてその上を流れる粉を洗ひ分ける。かうしてクローム鐵は岩石の中から選り分けられるのである。一同は只々その機械の精巧なのに驚いた。

再び事務所へ歸つて晝飯をすまし、やがて山の人々に厚意を深く謝して山を下りた。(多里小學校)

## ○退休寺

四伯郡下市驛を下りて南の方松原つづきの里道を上る事半里許り、靜かな林の中に十數軒の淋しい村がありすが、其の村の外れにあるお寺こそは此のお話の題になつておる退休寺とて、此の附近では誰知らぬ者もない名高いお寺であります。そして此のお寺の建つたのは面白い話が傳つてゐます。

其れは今から凡そ六百年の昔、此の地から程遠からぬ岩井垣と云ふ所には城があつて、野津豊後守平敦忠と云ふのが城主として此の附近に威勢を張つて居られました。所が豊後の守の奥方がふとした病氣で床に就き、其れが長引いて色々と心を盡した甲斐もなく、とうとう亡くなられたのであります。所て其の新らしい墓から毎夜々々火焔が燃え上ると共に幽霊の姿が現れては何處からともなく澤山の鬼共が寄つて來て其の幽霊をいぢめるさうであります。豊後の守はいとしい亡き妻がまだ成佛せずこの様な實め苦しみを受けるかと思ふと腹もちぎれる許り、ごうかして早く佛にしてやらねばならぬと、僧さんを招いて追善供養されたけれ共、ごうしても其の事が止みません。

そこで色々考へたり僧さん達に相談した結果、千人の僧さんを供養すれば成佛出來やうと云ふので、一人の老臣に命じ城から十町餘り北なる劍野と云ふ街道筋に茶屋を設けさせ、其處を通る僧さん千人を接待する事になりました。其の家臣は主君の意中を汲み取つて忠實に其の役を勤めました。今とは違ひ人通りも少く隨つて坊さんを千人も供養すると言ふ事はそう早く出來ぬ事でしたが「志あれば遂に成る」でそれでもいつの頃か半分の五百人を越えました。

或日の事六百三十人目とかに其の街道を通られる一人の坊さんに立寄り乞ひました。此の坊さんは一目見るからに何處となく凡々で無い事が家臣である茶屋の主人の目にもうつたのであります。

それはその答で此の僧さんこそは禪宗の總本山で修業した十哲の中の一人、下野國那須野が原に於て、其の附近の人や獸を害し苦しめた殺生石を法力によつて美事打鎮めたと云ふ玄翁和尚であつたのであります。



其處で此の茶屋の亭主は自分がこゝに茶屋を開いて千僧を接待する譯を一部始終打開けてこの和尚に亡き奥方の成佛を頼んだのであります。元より衆生濟度の爲め諸國を巡り歩く玄翁和尚が、此の請を斷る筈はありません。早速亭主について墓所に至り、香花を供へ水を手向け、一本の卒塔婆に入字の法文を書いてお經を唱へられた所、忽ち其の亡靈が現れて「之れで自分は佛に成る事が出来た」と云ふ意味の歌を詠んで姿を消しましたが、ほんとうに成佛したと見えて其の晩からは今迄の様に幽霊も現れぬ様になつたので一同が非常に安心をしたが中でも豊後守は長い間のなやみの種が一時にはれて、其の喜びは一通りではありませんでした。

そこで玄翁和尚は野津豊後守の切なる勧めによつて數日を此の岩井垣城に逗留されましたが、其の折、豊後守より和尚に向ひ「近頃北の海上から毎夜丑滿頃に一つの火の玉が飛んで来て、何時も決まつたやうに此の南の林の木に止ると云ふ事だがどう云ふ譯であらうか」と尋ねました所、和尚は暫く考へた末申されるには、「火の玉の止まる地にはきつと池があらう、そして其の池の中には尊い佛さんが居らつしやるに相違ない。それで火の玉とは龍がその佛に捧げる燈明であらう。」と申されたが、とうとう其の場に行つてしらべらる事になつて豊後守はじめ二三の家臣に案内されて火の玉の止まると云ふ附近をたづねた所、果せるかな大きな木の立ち並んでゐる林の中に底も知れぬ程青々としてをる池がありました。

そこで和尚は池のほとりの石の上に坐禪してその中の様子をじつと見つめておられた所、今迄鏡の様に静かであつた池の面は、風も無いのにさば／＼と波が起つたかと思ふ間に、逆巻き返る池の中程から大きな蛇體が現れ出ました。其時玄翁和尚は其の大蛇に向つて經文を唱へて説き諭された所、大蛇は忽ち頭を垂れて池の中に入つたと見えたが、今度は美しい女となつて現れ出て和尚に申すには「只今の御教へによつて有難くも蛇體から脱して佛になる事が出来ました、それでどうか此の所に一つのお寺を建て、下さい」と云つて、一尺餘りの觀音様の像を差出したかと思ふと、身はそのまゝ金の龍になつてすらくと天の彼方に上りました。

これを眺めてゐた豊後守はじめ家臣共は餘りの不思議な事に暫しは空を眺めてゐましたが、その中に今迄紺色にたゞへてゐた池の水は、からりとかはいてかたい平地となりました。

此の尊い事柄によつて、明日にも此の地を出立する都合であつた玄翁和尚は暫く此の地に足を留める事となり豊後守の力によつて、此處に立派なお寺が建つて名を金龍山退休寺と付けられました。それが今の退休寺なのであります。此の金龍山の意味はもう皆さんはおわかりでせう。寺號については玄翁和尚が暫く此の地に退休する（諸國を巡り歩く事を中止して退き休むと云ふ意味）と申された其の言葉によつてだそうであります。

それで此の寺の本尊は龍女が池の中から、かつぎ上げたと云ふ一尺餘りの佛像で、又寶物として龍のひげがあると云ひ本堂の後にある小さい池は昔の池の跡で、どんなひでり續きにも此の池の水は乾いた事が無いと云ひ傳へてをります。（佐伯是信氏）

### ○皆生温泉

米子町をはなれて、松原つゞき道を行くこと十五町、島根半島めがけて突き出した、五里の弓が濱！その弓の根元銀砂の中から、中國一の高峯大山の雪をとかしてぶつ／＼とわき出てゐる温泉！これがそも／＼我が皆生温泉である。

快い湯上りを朝の風に吹かれながら、素足になつて、冷やかな石英砂を踏むのも快い。静かにのぼる朝の大きな太陽！

すみきつた日本海の水の色！  
その水の上をすべつて来るオソンの氣持のよいにほひ！  
胸をはたけて心ゆくばかり深呼吸をすれば、心はとみに清らかなるのを感じる。



晴れた日の夕欄干にもたれて、夕照を眺め入るのは又格別だ。六千尺の大山の雄大の姿、それにうずまく雲の色……呼べばこたへんと思はるゝ際岐の島！白砂青松の大天橋！あゝ身も心もまことにひろやかになるやうな気がする。眞に皆生は郷土の樂園である。

この温泉の發見せられたのは、今から約五十年前のことである。當時元湯は海岸から百間ばかり沖合の海底でわいてゐたのである。漁夫などは俗に「泡の場」と稱し魚類の吐く泡だと思つて時々網などを下したこともあつた。しかるに其後自然が大なる幸福をこの地にもたらした。それは、海岸が日野川のはく石砂のため一年一二間宛埋まつて行き元湯が漸次陸地に接近し、遂に現在の如く温泉市街をつくるやうになつたのである。米子からはここに電車が通じてゐる。(鳥取縣の温泉による。)

### 第三 綴方指導系統案について

學習指導案の教育的意味については、已に第一編に於て述べたので、ここでは、綴方指導系統案の内容について述べよう。拙著綴方教授細目にかゝげた編纂主旨によつて順次述べて行きたし。

以下叙述する心持は綴方のみならず、國語の全科に及ぼされていいものと思ふ。よつて

代表的にここにかゝげて見る。

尤も次に掲げる私の考は、稍々以前に書いたもので、多少不満に思はれる點はあるが、しかし私にはこの細目編纂の仕事が少からず、私を伸ばしてくれたと思はれるので、私はこれをこゝに掲げることは決して無意味ではない。「國語教育」に嘗て掲げたものを抄録する。

先づその編纂方針の初めに當つて私は、

一、綴方を兒童の人生科として組織立てゝゐること。

といふ一項を掲げてゐる。この項について詳細に説明することは私の綴方教授法の全系統を説明することになるので、ここではそれを拙著<sup>文化</sup>綴方新教授法にゆづることとした。

綴方に人生的意義をもたすことは最近の綴方の著しい傾向であらう。

今私の手許に新しく編纂された綴方教授細目が、五種ばかりあるがそれを見てもさうした傾向が分る。細目は大阪のものが二つ、東京のものが二つそれに私のものと、都合五種



あるが何れも最近のものである。それ等がひとしく人生教育の立場を明らかにしてゐるのである。その一なる東京高師附属編纂の細目の序言にはかう云はれてある。「綴方は自己の生活を文にあらはし、自己を成長せしめることを目的とする。」と、又大阪某小學校編纂の細目の序言には次の言葉がのせられてある。「綴方は兒童の全人的教育をなさねばならぬものである。即ち人生科として綴方の生命を認めねばならぬ。この精神を基調とした。」と、何れも人生的教育の思想が高潮されてある。これを見ても、いかに一般にさうした思想が浸潤して來たかと窺はれる。私は頗る同感に思ふ所である。

しかし、私は更に一步を進めて綴方を人生科として組織立てようとした。これはたゞ教材論に止るべきものではなく、課題の上にも推敲の上にも、物を觀察する上にも、すべて人生的意義を多分にもたせてゐる。さうした立場から、私はこの私の綴方教授細目の編纂方針の第一項に「綴方を兒童の人生科として組織立てゝゐること」——といふ大膽な叫びをなした。

二、自由の氣分を濃厚にあらはしたこと。

これは、従來の綴方教授細目が非常に固苦しいもので、教師も兒童もその束縛をうけて自由な活動を阻害されてゐた。次のものはその一例である。

週	時	文題	内容	形式	備考
		二年生ニナツタカクゴ私ノ家大ト猫	修叙叙 讀讀讀	形性 實文 體文 構式	備考
			叙事文 口語 崇	追歩式 追歩式 追歩式	指導法 指導法 指導法
			説明文 同 同	頭括式	模寫法

これは、某氏綴方教授法の上に掲げられてゐる教授細目を抄録したものであるが、かうも各方面から拘束された日にや全く動きがとれなくなつてしまふ。

又某氏綴方教授法によれば、その教材内容を極度に狭くして、兒童の生命を壓縮してゐるの感がある。例へば「二つのものゝ存在の記述」とか、「位置を限定せるものゝ記述」とか云ふのがそれで、かく教材が狭い範圍に限られることになる、全く兒童は其の狭ぐる



しさに堪え得ない。私はそれ等の不自由から解放して最も自由な立場で細目を編纂した。私は次の二項の注意によつてこの氣分を可なり濃厚に表し得たと信じてゐる。

(イ) 自由選題を多く取り入れたこと。

従來の細目は、練習目的若しくは課題のみを配當して殆ど自由選題の存在をみとめないものであつた。私は自由作を重く見て配當してゐる。

(ロ) 指導教材の内容を廣くしたこと。

従來の教材はその内容が極度に狭くなつてゐたことは上述の通りである。この弊を除くために教材の内容をひろくとつた。かくの如くして、私は私の綴方教授細目に於て、自由の氣分を濃厚にあらはし得たと信じてゐる。しかし、これを使ふに當つて偏にこの細目のために囚はれたりしたならば、勿論それは必らず弊害を伴ふものであるから、細目使用に當つては、細目の精神を本當に知つて、その精神を生かすべくつとめなければならぬ。私は細目の使用方針の條下に

「教授細目は教授の豫定であるから、それは尊重せなければならぬが囚はれてはならぬ。教授細目編纂の眞精神を知つてそれを活用して欲しいのである。教授細目は人によつて生き人によつて死するのである。恰も作物に施す肥料が、その施用法によつて、或場合には頗るよく肥效を顯はし、或場合には却つて作物を枯死させる事のあると同じである。」——と云ふ注意を添へて置いたのであつた。次には、

三 教材を創作教材、指導教材の二方面からとつたこと。

指導教材、創作教材については、既に拙著に於て大體の輪廓を述べて置いたのであるから、ここで更に述べると重複すると思はれるので、ここではその内容については省略することとし殊更にこの二方面の教材をとつたことの理由を述べて置きたいと思ふ。

従來は指導と云ふ立場の下に、指導作のみに没頭し、又或るものは自由と云ふ華やかな名のもとに自由作のみこれ事とした。しかし眞理はどちらにもなかつた。兒童の生命生長の根源を凝視するとき、どちらにも偏することは許さない。ここに於て兩教材を課するの



必要がある。これ私がこの兩教材を共に採り来る所以である。而してこの兩教材の價値は教育的立場に於て何れを重く、何れを軽くするといふことは出来ない。  
私は次表の示すが如き系統をもつて細目の全面に兩教材を配列してゐる。

綴方教材配當一覽表

學年の 一單元 の所要 時數	尋 一時乃			一 至三時			自由作	親た ま書 く	日記 を 書 く	書翰 を 書 く	時間 の 順 序 に お け る こ と	感 じ か け を 考 へ る こ と	わ け を 考 へ る こ と	綴 方 會 文 例 計
	I	II	III	計	I	II								
一四	一三	一三	一三	三六	九	九	八	(一)	(五)	(六)	四	(三)		(七)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(二)	(六)	(六)	四	(三)		(九)
三五	三五	三五	三五	一〇五	二八	二八	二八	(三)	(九)	(九)	四	(四)		(十一)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(四)	(十)	(十)	四	(六)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(五)	(十一)	(十一)	四	(七)		(十一)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(六)	(十二)	(十二)	四	(八)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(七)	(十三)	(十三)	四	(九)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(八)	(十四)	(十四)	四	(十)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(九)	(十五)	(十五)	四	(十一)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(十)	(十六)	(十六)	四	(十二)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(十一)	(十七)	(十七)	四	(十三)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(十二)	(十八)	(十八)	四	(十四)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(十三)	(十九)	(十九)	四	(十五)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(十四)	(二十)	(二十)	四	(十六)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(十五)	(二十一)	(二十一)	四	(十七)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(十六)	(二十二)	(二十二)	四	(十八)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(十七)	(二十三)	(二十三)	四	(十九)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(十八)	(二十四)	(二十四)	四	(二十)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(十九)	(二十五)	(二十五)	四	(二十一)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(二十)	(二十六)	(二十六)	四	(二十二)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(二十一)	(二十七)	(二十七)	四	(二十三)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(二十二)	(二十八)	(二十八)	四	(二十四)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(二十三)	(二十九)	(二十九)	四	(二十五)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(二十四)	(三十)	(三十)	四	(二十六)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(二十五)	(三十一)	(三十一)	四	(二十七)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(二十六)	(三十二)	(三十二)	四	(二十八)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(二十七)	(三十三)	(三十三)	四	(二十九)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(二十八)	(三十四)	(三十四)	四	(三十)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(二十九)	(三十五)	(三十五)	四	(三十一)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(三十)	(三十六)	(三十六)	四	(三十二)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(三十一)	(三十七)	(三十七)	四	(三十三)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(三十二)	(三十八)	(三十八)	四	(三十四)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(三十三)	(三十九)	(三十九)	四	(三十五)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(三十四)	(四十)	(四十)	四	(三十六)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(三十五)	(四十一)	(四十一)	四	(三十七)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(三十六)	(四十二)	(四十二)	四	(三十八)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(三十七)	(四十三)	(四十三)	四	(三十九)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(三十八)	(四十四)	(四十四)	四	(四十)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(三十九)	(四十五)	(四十五)	四	(四十一)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(四十)	(四十六)	(四十六)	四	(四十二)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(四十一)	(四十七)	(四十七)	四	(四十三)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(四十二)	(四十八)	(四十八)	四	(四十四)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(四十三)	(四十九)	(四十九)	四	(四十五)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(四十四)	(五十)	(五十)	四	(四十六)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(四十五)	(五十一)	(五十一)	四	(四十七)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(四十六)	(五十二)	(五十二)	四	(四十八)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(四十七)	(五十三)	(五十三)	四	(四十九)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(四十八)	(五十四)	(五十四)	四	(五十)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(四十九)	(五十五)	(五十五)	四	(五十一)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(五十)	(五十六)	(五十六)	四	(五十二)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(五十一)	(五十七)	(五十七)	四	(五十三)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(五十二)	(五十八)	(五十八)	四	(五十四)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(五十三)	(五十九)	(五十九)	四	(五十五)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(五十四)	(六十)	(六十)	四	(五十六)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(五十五)	(六十一)	(六十一)	四	(五十七)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(五十六)	(六十二)	(六十二)	四	(五十八)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(五十七)	(六十三)	(六十三)	四	(五十九)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(五十八)	(六十四)	(六十四)	四	(六十)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(五十九)	(六十五)	(六十五)	四	(六十一)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(六十)	(六十六)	(六十六)	四	(六十二)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(六十一)	(六十七)	(六十七)	四	(六十三)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(六十二)	(六十八)	(六十八)	四	(六十四)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(六十三)	(六十九)	(六十九)	四	(六十五)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(六十四)	(七十)	(七十)	四	(六十六)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(六十五)	(七十一)	(七十一)	四	(六十七)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(六十六)	(七十二)	(七十二)	四	(六十八)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(六十七)	(七十三)	(七十三)	四	(六十九)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(六十八)	(七十四)	(七十四)	四	(七十)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(六十九)	(七十五)	(七十五)	四	(七十一)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(七十)	(七十六)	(七十六)	四	(七十二)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(七十一)	(七十七)	(七十七)	四	(七十三)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(七十二)	(七十八)	(七十八)	四	(七十四)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(七十三)	(七十九)	(七十九)	四	(七十五)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(七十四)	(八十)	(八十)	四	(七十六)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(七十五)	(八十一)	(八十一)	四	(七十七)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(七十六)	(八十二)	(八十二)	四	(七十八)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(七十七)	(八十三)	(八十三)	四	(七十九)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(七十八)	(八十四)	(八十四)	四	(八十)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(七十九)	(八十五)	(八十五)	四	(八十一)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(八十)	(八十六)	(八十六)	四	(八十二)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(八十一)	(八十七)	(八十七)	四	(八十三)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(八十二)	(八十八)	(八十八)	四	(八十四)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(八十三)	(八十九)	(八十九)	四	(八十五)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(八十四)	(九十)	(九十)	四	(八十六)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(八十五)	(九十一)	(九十一)	四	(八十七)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(八十六)	(九十二)	(九十二)	四	(八十八)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(八十七)	(九十三)	(九十三)	四	(八十九)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(八十八)	(九十四)	(九十四)	四	(九十)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(八十九)	(九十五)	(九十五)	四	(九十一)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(九十)	(九十六)	(九十六)	四	(九十二)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(九十一)	(九十七)	(九十七)	四	(九十三)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(九十二)	(九十八)	(九十八)	四	(九十四)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(九十三)	(九十九)	(九十九)	四	(九十五)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(九十四)	(一百)	(一百)	四	(九十六)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(九十五)	(一百零一)	(一百零一)	四	(九十七)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(九十六)	(一百零二)	(一百零二)	四	(九十八)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(九十七)	(一百零三)	(一百零三)	四	(九十九)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(九十八)	(一百零四)	(一百零四)	四	(一百)		(九)
三三	三三	三三	三三	九九	二六	二六	二六	(九十九)	(一百零五)	(一百零五)	四	(一百零一)		(九)
三三	三三	三三												



計	高 三時乃			一 至七時			高 三時乃			六 至六時		
	計	II	I	計	III	II	計	III	II	計	III	II
	七二	一八	二八	七二	一八	二六	七二	一八	二六	七二	一八	二六
	九	二	四	九	二	三	九	二	三	九	二	三
	七	一	四	九	二	三	九	二	三	九	二	三
	90			100			100			100		
	70			100			100			100		
	八〇			九			九			九		
	一六			一			一			一		
	七			一			一			一		
	一〇			一			一			一		
	一五			一			一			一		
	一六			一			一			一		
	九			一			一			一		
	四			一			一			一		
	二三			三			三			三		
	四三			三			三			三		

□備考 各星期數字は凡て教材配列番號「文」とあるは文例を示したものである。

#### 四、總合的指導並に鑑賞力を養成するため、四十幾篇の模範文を採り入れたこと。

模範文を綴方教授に使ふことは、兒童に模倣を強ひることになるから弊害が多い。依て模範文は教育的價值のないものだといふ説をなすものがあるが、私は決してさうは思はない。私は模範文は決して模倣を強ひるものでないばかりか、文の表現に於て、乃至は思想の發展の上に於て極めて總合的な指導の上に効果のあるものだと思ふ。「文の骨合」なるものはいくら分解して説明したとも分るものではない。けれども、一度それが具體的な範文として提供されることになると、暗黙の中に兒童の心琴に觸れて、そこに極めて微妙な共鳴を起す。その共鳴こそは本當に生命自身から考へると、それは悟りの境地なのである。私はどうしても指導の立場から、範文を取り去ることが出来ないのである。それで私はその指導教材の内容を具體的に表現した範文を採つてゐるのである。

尙、この範文は同時に鑑賞力を養成する材料ともなる。鑑賞力は、綴方に於て重大な位置をもつ能力の一つであるから、充分これが培育をなさなければならぬ。それには大體



二つの方法がある。一つは兒童相互がその作品を發表し、それを鑑賞するものと、一つは他から優良な範文をとり來つて、それを學習の仕事の一つとして鑑賞するものである。

範文は後者の意味の仕事をはたす上に於て重大な意義をもつてゐるものである。私はここにも範文の存在理由があるやうに思ふ。それで私は四十幾篇の範文を採り來つて綴方教授細目にあしらつた。尙細目全體に於て四十幾篇の範文をとるに止めたことは、範文があまりしつこく、お盛澤山にとり込まれることは、却つて細目の全系統をつかみにくくなりあまり尨大な冊子となり實際使用上に不便を來たすと思つたからである。私の細目は菊判七十頁に止めたのは、實はさうした私の意圖からだつた。これは使用上の問題に關することではあるが序だからこゝで申して置きたい。

##### 五、適當なる文話をも配當したこと。

範文が總合的指導に生命をもつてゐるならば、文話は分解的指導に生命をもつてゐるものだと云へよう。私はいろいろな文話によつて、どれだけ導かれたか分らない。

私が文話をとつた方針は大體二つある。一つは基本的指導教材（生活指導の教材）の目的をはたすための文話と、今一つは附帶的指導教材（表現指導の教材）の目的をはたすための文話がそれである。而して生活指導のための文話は後に掲ぐるであらう細目例によつて見ていたゞけば分る通り、必ず教授上の注意として掲げてゐるし、表現指導のための文話は主として下段の参考事項の中に入れてある。これは基本的指導教材の文話即ち生活指導の文話は必ずその教材の前に當つて行はるべきものであるが故に、細目の上に配當してゐる各單元の題目の下に之をかゝげてゐる。附帶的指導教材の文話即ち表現指導の文話は創作教材、基本的指導教材の何れにもその表現に即して隨時に行はるべきものであるが故に、下段の参考事項の中に入れてゐる。然るにこの見解が明らかにされてゐない場合には全くこの兩者の文話が混同されてしまつて、細目の上にも何等のけじめを置かないで、たゞ無系統に文話が次に配當されるといふやうな誤つた方法をとるやうになるのである。

六、教授の實際に使用するにあたり、最も便利なるやう留意したこと。



これについては、「範文」のところて少し述べて置いた筈である。その外細目の系統を一見して分るやうな表を入れたこと、菊版大として教科書と同形としたことなどがあるが、これはあり大きな問題でないので、ここではあまりくたくたく述べることをよしたいと思ふ。

この外、私が留意してゐるのは、一単元の教授時数を従來の細目のそれよりも多くとつてゐることである。従來は一単元の教授に一時乃至二時を配當するにすぎなかつた。そのために教授が不徹底に終つたやうに思ふ。或一つの単元の仕事が來るとそれを一二時間教授する。やがて又次の單元が來る。教授はたゞ間口を覗いたきりで、次から次へとうつて行く。そして遂に教授は徹底する時はなかつた。かうした弊を除くために私は一単元の教授時数を多くとつてゐる。例へば尋五に於ては三時乃至五時をあてゝゐるのである。しかし、これを變更して、一單元七八時を要する取扱をしても勿論いいと思ふ。

尚、各學年の終に綴方の會を開き文集をつくつて、作品を展覽し批評し合ふやうにして

ゐる。

以上、大略私のもつてゐる綴方指導系統案の體制の根據について述べたのであるがこれを、具體的に表はせば次のやうなものになる。

尋常科第五學年綴方教授細目	
第一學期	約二十八時
週	三二一
教材及び例	一、自由作 凡三時 二、觀たままを描くこと 凡三時 1、自然的現象の精細なる描寫を指導する。 2、精寫粗描を適當に用ひて、文を生かすことにつとめる。 3、文例 ○草をしいて 青々と繁つた草の上を、白い蝶と黃い蝶とがひらくと舞うてゐる
参考事項	○文題 春に入りて 春雨 雛まつる頃 寫生、スケッチ 文章は繪をかくことと同じである その心持になつて文をかくのがよい。

第三篇 高學年の國語生活學習



る草の間を見えかくれして小川の水が優しい音をたて、流れる。その水面が日光を反射して處々銀色に光つてゐる。もうい眼をあけて見ると、とき色のバラソルが二つ、ばつと花の咲いたやうに彼方に揺れてゐる。向ふの森は紫色に霞んで、其上に柔かな白雲がふわりと浮んでゐる。暖い風が頬を吹く。日はぼか／＼と照る。草をしいてうつとりとしてゐると、しきりにれむくなる。自分立つて歌をうたひだした。

七六五四

- 三、自由作 凡四時  
 四、時間の順序に述べること 凡四時  
 1、單に記憶事項の叙述に止めず、進んで眞に我ものとして創作的に述べねばならぬ。  
 2、文例

**單純と複雑**  
 すぐれた描寫は單純に書いて複雑をあらはしてゐる。

**單純化とは**

單純化とは事物の個性を選んで類性をすてることである。

○文題

神武天皇  
 日本武尊

**先づその事柄の中にひたり込め**

昔にあつた事柄などをかく場合には、昔の人になつたやうな氣分になることが大切だ。昔の古めかしい氣分の中にひたり込むやうな心持になるのである。

第四 高學年國語學習の實際

一 文集を中心とする綴方學習

綴方はなるべく自然な形で學習させたい。そのために綴方の作業を一つの遊戲の形として行はせることは面白い。文集を作るのはその一つの方法である。

文集は一二年の低學年でも勿論出来る。私の二の組（尋一二）では「白鳩」といふ謄寫版の雑誌を作つてゐる。原紙にかくことも、印刷することも、製本することも、すべて子供達がやるのである。そんな仕事の中に綴方以外の話方も、聽方も、讀方も自然に行はれる。文集をつくる際に、きれいに作らうと思つて、あまり教師がやかましく云ふと、作業の面白味がなくなつてしまつて子供は却つていやがるやうになり、又作品の價値も上らない。文集には、自由に何でも入れたい。繪畫、童話、童謡、日記等總て自由であつてよい。私が前任地の鳥取師範附屬で作つてゐた尋五の文集「芽生」の中から、作品を四五篇ぬいて見よう。

○浸水の夜

ばつと目がさめた。洋燈の火がうすぐらく光つて居る。



時計はかちかちと時をきざんで行く。見るともう三時前だ。父も母も起きて居られる。隣りの室ではつちの清蔵等の話聲がきこえる。僕の家泊つて居る知り合ひの人は水を見に出てまだもどらないさうだ。となりでもむかうでも話聲がきこえる。おぢいさんが下へおりに見るといつて、ちやうちんをともし下りてゆかれた。間もなく上つて来て、かどにはまだ来てゐないが、向ふの雨戸のすきから水のような物が見えるが、もうにはに來てゐるらしい。とおつしやつた。お父さんが正嘉下りて見ないか、といはれたので、下りて見ると、なる程向ふの戸のすきまから、だぶり、だぶり水がうごいてゐた。下の町はもう水につかつて居る。人々がちやうちんをともしして、ちやぶりくと水の中を歩いて居る。二階に上つて、床には入つた時、下の方でごとくと戸をたゝいた。ぎいと戸があいて誰かが入つて來た。それは知り合ひの人であつた。二階に立つて話をはじめられた。きくと智頭橋、菊橋は兵隊や、青年團員が土俵をつくつて土手につんでゐるので、水は川外にどん／＼ながれてゐる等と言はれた。しばらくきいてゐたがいつのまにかねむつてしまった。(綱谷正嘉)

### ○柿取り

この前のことである。  
私の家のすみの方に大きな柿の木があつた。或日柿をとらうと思つてとりかけてみたが、木が高くて長いさなでもなが／＼とれない、これを見てゐらつしやつたお母さんが、私に向つて、「あき子はおてんばだから屋根にのぼつてさつてごらん」といはれた。

私も前から一べん屋根に上つて見たくなつたので、「なんぼでもあがるよ」と言つた。妹がほしごなもつて來た。私はとくになつてづんづん上つていつた。やねにのぼるころなんだかやれがおちさうな氣がしてもう一步も上ることが出來なんだ。下では妹が「そらおちる」と大きな聲で言ふのでなほ一そ／＼こわくなつてきた。

そうしたらお母さんが「いくらおてんばでもこわいのかね」と言はれたので、くやしくなつて思ひ切つて上つた。そして「ふうん、これはどうぢや」となまいきなかつこうをした。下では妹がちやんとさをなもつてゐる。私が「早くそのさをかせい。おい。」と言ふとさを、ほんとおけてくれた。

私は上をむくと赤いのがたくさんある。まあ一つとつてたべてやれと思つてとつた。妹は上をむいて手を出してまつてゐる。私がわざと大きな口をあけて一口たべると妹は「なーんだね」といつた。お母さんは私にそんなことをしてはいけない、といはれたので、かぢりかけを下へなげてやつた。妹はなげてやつたのをちやうど下でうけとつてゐた。お母さんがそんなことをしてはいけないといはれたので、私はもうそんなことはせず一しやうけんめいでとつては下へなげた。そのうちにもう十七よといふのでだるいからおちるといつておちた。おちてみんなとたべる時さつきのかつころはまるで猿のやうであつた。お母さんに笑はれた。(中頭あき子)

### ○すす

大すす小すす  
ちりちり小すす  
ぢやらぢやら大すす  
どこへいつても  
すすばかり。(石賀つた子)

### ○冬

大寒む小寒む



あつちに向いても  
こつちに向いても

眞白

おや／＼あつちに雪だるまが一つ  
ぼろしをかむつて竹もつて  
こつちをむいて

にらんでる。(小畑愛子)

### ○秋の朝

運動場のかたすみに

きらり／＼びかり／＼

かがやく

木の葉が秋風に

ふかれか／＼やく秋の朝。(清水 繁)

### ○大晦日

大晦日の晩飯の時うどんとそうめんを腹一ぱい食べてこたつにあたつてゐた。父もこたつにあたつて、新聞を讀んでゐられた。ヒュー／＼と吹く風の音としんと積る雪の音の外は何も聞へない。時々遠くで犬のワンワンといふまびしい鳴聲がさこえるばかりであつた。新聞を讀み終られた父は「今年は往しんに行かなくてもよい

だらう」と言はれた。そのわけは毎年大晦日にはどういふ因縁か父は往しんに行くのであつた。しばらくして時計は九時を報じた。其の音も淋しく消へてもとの静かさにかへつた。戸を開ける音……「ガラツ、ガラツ」……「ごめんなさい」僕はほつと思つた。どうやら田舎へいゝが来たらしい。父は「やれ／＼又今年もか」と言つて立ち上られた。女中が来て「又往しんでございます」父「どこだ」女中「宮下の徳田さんでございます」父「あゝさうか、又奥さんが悪いのだな」とつぶやかれた。早速服に着かへて門を出られた。

僕も門までついてゐた。今日あけた道にははや二三寸も雪がつもつてゐた。「ガラツ」と門の戸をあけて外へ出ると其所に車夫と車が一臺とまだ五六人の人が居た。病院から一通りの薬をもつて来たので父は車に乗られた。車夫は車をひき出した。五六人は車の後をおしたり前をひつぱつたりして居る。

車は雪の上に二筋のあとを残してかたの村をさしてきていつた。  
僕は其の時父が何のけがもなしに歸つてこられるやうにと神に祈つた。(松本正威)

### ○私の可愛い犬

私の家の近所にはたくさん犬がゐますが、中でも一番可愛いのはサムと言ふ犬です。サムはほんとに可愛い犬です。このサムは小さい時家の犬でおち／＼や其他いろ／＼のじよう物をたべさせて大きくしたのです。それが今近所の家へ上げてゐるのですが、其のうちからも可愛がられ、私たちにも可愛がられてそれは／＼幸福な犬です。又、毛色は美しい上、よくげいをします。たとへば「おすわり」と言へばおすわりをしますし、「おあすけ」と言へばいくらでもたべずにまつてゐます。ほんさに可愛い犬です。ある日の朝でした。サムをかつてゐるうちの人「サムはあなたの家におりませんか。」ときかれたので、私は「いえ」と言ふと、「そうですか、今朝になつていつもれてゐる小屋にゐませんか。」とのことで、私は大へん心配しました。その日はちやうど日曜でしたから



すぐにさがしに出ました。けれど見あたりません。そしていくらまづてもかへつてきません。私はいろ／＼さがして見ましたがあません。毎日おみやさんにつれてまゐるサムはいないので氣を落しておみやへまいり「どうぞサムがみつかりますやうに」とおがんでかへりました。けれどサムはあません。私はおみやさんがいやになりました。そのうちに夜になりました。私は心配しながらとこに入りました。朝おきて見ると「サムが来たよ」とのこえがしますので門口へ出て見ると、サムが来てゐます。私はうれしくて「サムヤ／＼」とあたまをなでてやりました。きけば人をまちがへて立川の方へ行つてゐたそうです。(橋尾元子)

### ○黒猫の目

或夜の事であつた。夕飯を皆がたべてゐると、いつもひょうきんをいって皆を笑はせる中學四年の兄が「わしお便所にいつて来るわい。」といつて便所の方へ行つた。とあわただしくしようじをあけて「母さん私が今便所に行つたら便所のたなからまつ黒なものがおちてゐるわいな。」とひい／＼言いながらいふので、僕が大きな聲で笑つたら「まさばうも行つて見よ。」とおこるやうに言つた。僕は二尺さしを持って便所の所へ行つて見ると、電氣がついてないのでまつ黒だ。すると二間ほど前に二ツびかり／＼と光るものがある。何だらうと思つて、おそる／＼ものさしてさばつてみると「ニヤ／＼」と一撃いつたのでびつくりして皆の所に来て「なんだあ、ひかつたものがあつたけそいつにさばつたらニヤ／＼と言つたが、るうそくとぼして行つて見やうか。」と言つて、さつそくるううそくとぼして行つて見ると、黒猫がうづくまつて二つの大きな目を光らせてゐた。僕を見ると、急いで裏庭の方に走り出た。(伊垣)

次に掲げるのは兒童の村小學校の文集「芽生」「子供の村」等の一部である。

### ○日記

八月七日 金曜日 晴

鈴木さんと鎌倉へ行つた。

去年トマトがなつてゐたにはの島に今年もトマトが赤くなつて居た。

八月八日 土曜日 晴

昨日くたびれたのでねぼうしてしまつた。

ちくおきんきのふきこみばんに僕の歌をふきこんだ。あとでかけてみたが良くきこえなかつた。

十一時頃から三時ごろまで泳いでおなががすいてしまつた。鈴木さんが沼津へ行くのでおそくまで居られないから明るい中にかへつてきた。十一時の汽車で鈴木さんは沼津へ行つた。

八月九日 日曜日 晴

今日利光君から返事がきた。すこしぐわいがわるいのでなんにもできない。

八月十日 月曜日 晴

ぐわいがすこしよくなつたのでボートにのつた。僕の家のにはを油繪で寫生した。  
今日吉田君のところへ手紙をだした。(峰岸正樹)

### ○私の生活を

學校はこのごろどうなつてゐますか。私は夏の學校からかへつて家にゐるもんだからせつかくくろくなつたのがはげしてしまつたわ、だからこれから選手あたりにいつてゐるをくろくしませう。



昨日は私大勉強よ手紙を三通かいたわ二年の時の友達の丹羽美智子さんに一年の下中和子さんにわかちやん。午後六時頃下中さんから返事がきた。學校がはじまる時もつていきますわ。昨日はあついとおもつたら、今日にはばかに涼しい。へんだこと、こうかいてるうちに日がさしてきた。それぢや晝ごるは又あついだらう。たまらない。姉さんは出かけた。あそぶ人がぬない。つまらないなあと思つてゐる。この手紙をかくにもよいなことでない。これからこれをだしにいくのだ。かんがへてもうんざりしてしまふ。そんなことを考へずに一日おもしろくあそばさう。ではさようなら。(杉直子)

### ○ボート遊び

昨日三時間めの終りから岸と久布白とがなにかいつてゐた。きいて見ると久布白が岸の家に行く話だつた。僕もいつて見ようと思つて、僕もいこうといふと、よし、いといつたから、僕もいくことにした。僕が岸の家に行くときまれば、かばんはじやまだから、アブちやんの自轉車をかりて家にかばんをおきにかへつた。かばんをおいて學校に歸へつてから、僕がそとへ出かけようと言ふとまだ利光もゆくといつたから利光をまつておようといつたから「ではそうしよう」と十四五分ばかりまつたけれど、こないから、僕が利光を自轉車でむかいにいつた。志垣の内のおばさんにきいて見ると、利光さんはどつかに出た。といつたから、僕がたぶん阿久澤の所にいつたのだらうとさつした。それからすぐ學校へ歸へつて僕が阿久澤の所に利光がいつたと思つた、ことをいつたら、皆ぶつ／＼いいながらでかけた。久布白は豊島師範のよこの電氣屋でラヂオの部分品を買つた。そして話々驛にいつた。きつぶをかかつて電車に乗つた。電車の中では岸と久布白とはいろいろ話してゐた。その中に赤羽といふこえがきこえたので電車から下りた。

僕は驛から岸の家は近いと思つたら遠い。やうやく岸の家の門の上り口の所までついたら、そこいらの

くろんぼが帽子を見てあかんぼんといつたら、岸はあんなやつをかまらなと家の門にいつた。門を開けやうと引つづつてもあかないので岸は「こちやん戸を開けてくれ」といふと、こちやんがやうやくきて戸を開けてくれたので、中に入つた。それからまずボートに乗ることにしてボートに乗るしたくをした。それからボートを荒川のふちまでよいしょ／＼と持つて行つた。そして僕等がボートに乗るうとするらしらない人がきて「ちよつとのつけてくれ」といつてボートに乗るとぐらつくのであつちへひつくりかへりさうになつたりこつちへひつくりかへりさうになつてゐる中にと／＼ひつくりかへつてしまつた。そして水を一ばいいたので、僕たちがもんくをいゝながら、ちやんと水を出してくれといふと、水を出したがまだちよつとのこつてゐたから又ぶつ／＼いふとそのまゝこがへいつてしまつたのでしかたなしにそれに乗つて向ふ岸へこぎ始めた。岸をはなれると皆こわがつた、だん／＼真ん中に出るとながれはじめたのでびつくりして一生懸命にこいだ、それでも、ながされ／＼／＼やうやく、向ふ岸に着いた。そしてボートからなりて砂原へねころんでつかれたやすめた。それから又もとの岸へこぎもどることにした、久布白と岸とはこんど一生懸命にこいで早くもとの岸にかへらうといゝながらボートに乗つた。はじめから力を入れたものだから真ん中に出た時にはかへつて力がぬけたので又ながされ始めた。水門にながされては大へんといふので皆あせりだした。こつちをこぐんだあつちをこぐんだといつておこつたそしてふいに鐵橋の方を見ると女の人が舟からしやうべんをしてゐたので皆わらいだしてしまつた。それから一生懸命にこいで、やうやく岸に着いた。ボートから下りて三人で砂原の所でやすんでゐたら、久布白が、もう一度向ふ岸にいかないと岸にさそふと岸は、さぞつかれたやうにもういかぬといつたので僕と久布白の二人で向ふ岸へいくことにした。(五年吉田弘次郎)

### ○鳥取へ



▲ 皆さん僕は夏の學校をすますと、翌日峯地先生と一しよに鳥取へきました。東京から鳥取の倉吉までは二百里ありますからちようど一晝夜かゝります。

▲ 初めての土地ですから途中ですいぶんいゝ景色をみました。

▲ あの美しい保津川

▲ 支武洞

▲ それから地震でくづれた城の時の町

▲ 君たちの話を知つてゐるいなばの白兔のところへお呼びしてみましたよ。

▲ 僕は小さい松の小山からおきの島をじつとながめてだいこくさまのことを思ひました。久布白君たちがゐたらあの海の中で劇をするだらうと思ひました。久布白君が白いシャツをきて、向ふのおきの島にゐると吉田君や渡邊君たちがだかになつてドブン／＼わにざめをやる。中村君が兄神様になつていばつてくる。やがて忠さんのだいこくさまが大きいふくろをかついて松山からおりてくる……そんなことをゆめのやうにかんがへてゐるうちに青い波上を白い帆が走つてゐました。

▲ 九月にかへつたらあはがきをみせませう。

▲ 僕は峯地先生と二人でおきの島までボートをこいでゆきました。(大正一四、八、六夕方 白兔驛にて野村芳兵衛)

### ○いなばの白兔

伏野に

寝てゐる

いなばの

しろうさぎ

ピヨ

ピヨ

八十神さまの

來ない 來ない

うちに

ピヨ

ピヨ

身干山に

あがれ

(野口雨情氏)

### ○鳥取から

第三篇 高學年の國語生活學習



今日は野村先生と二人で出雲の神社にまいりました。神社はその名のやうに大そう大きな社で高さが八十尺もありました。野村先生と二人でその大きな社を見上げました。松江では城山にあげりました。こゝでは水の都の松江が一目に見えました。しんじ湖の水はしづかでした。ちつほけな汽船がポツポツはしつておりました。

夜の十時半に野村先生とわかれて私はひとりいなかの家にかへります。

野村先生は大阪へいらつしやるのです。いうべ枕をならべて、私のうちでやすんだのにわかるのはさびしかつたです。

皆さんごたいせつに十一日夜十時三十分下市えきにて。(墨地光重)

さて、文集が出来たら、朗読會を開きたいと思ふ。

### 朗読會

朗読會の仕方に大體二通りある。一つは作者がその作品を読んで發表し、他の児童と教師がそれを聴いてゐて、讀み終つてから相互に所感を發表し合ふ學習の仕方である。このやり方は、批評が峻烈になると、ともすれば、却つて創作力を萎縮さす危険はあるが、相互に純に自己の所感を述べ合ふのだつたら、相當に効果のある綴方處理法の一つであらう。

も一つの仕方は作者が文を朗讀し、一同はたゞそれを靜聽するだけで、大體進んで行くものである。これは所謂教師の指導といふものは加はらないが、そのかわり各人各様に、自由に解釋し判斷して、その生命を伸ばし得る長所をもつてゐる。

何れにしても朗読會は児童の生活指導並に表現指導の上に重要な價值をもつものである。次に掲ぐる例の如きはどちらかと云へば生活指導の方面に色彩の濃厚なものである。

これは尋五のKといふ児童が、次の作品を朗讀したときの事である。作者は自分の席に立つて元氣よく朗讀し初めた。

### ○僕のこと

僕は大正二年の一月五日の朝八時頃おぎやあ〜と泣きながら生れたのです。

私は父母の慈愛をうけて、一つ二つと大きくなりました。そして四つの春から四町にある愛真幼稚園にかよひました。あばれることは一番で、先生に叱られて泣かない日はありませんでした。さうする中に七つになり、附屬小學校に上りました。そして「ハト」「ママ」等の字を習つてかへり、父母に「僕は先生にハトママといふ字をならつたよ。」と白まんしていひました。その頃は、今は米子に行かれた三明先生が、訓導であつたので、先生のすべる頭をほうきてなでたりして遊んだこともありました。

さうして私は二年生、三年生をめでたくして四年生の五月廿二日の事です。學校から歸つて見ると、兄や叔



母が一通の電報をおいて泣いてゐるのです。何うしてないてゐるのかと思つて見ると、電報には母からりよこ  
中の父が死んだと来てゐます。僕はその時のかなしみはなんとも云ひようがありません。

もう四年もすぎ、私は五年生になりました。

其の間の父母の心配はどんなに多かつたか知れませんが、今のやうになつたのは父母や先生のおかげだとしみじ  
み思ひます。

私はこの文は左程上出来とは思はなかつたが、作者はこの作に全生命をぶち込んでゐた  
のである。作者は初は、威勢よく讀んでゐたのであるが、

「……さうして私は二年生、三年生をめでたくこして……」

のあたりに来ると、彼の讀み聲がかすかに慄へて来たのであつた。私は「おやつ」と思  
ふ中に、作者は尙も讀み進めた。

「學校から歸つて見ると一通の電報をおいて泣いてゐるのです……」

まで来ると、彼の聲のふるへは一層ひどくなつて来た。この時私は「作に對する感じが  
一時に作者の感情にこみ上つて来たのだな」と思つた。子供達は異様な目を輝かして見入

るのであつた。

「電報には母から旅行中の父が死んだと来てゐます。」

やつとこれだけ讀み終つて、作者はぼろ／＼と涙をこぼしながら遂に机にうつぶしてし  
まつた。みんなは初めて、その泣く理由が分つたのである。

作者は机にうつ伏したまゝ、歎息してゐる。

沈黙の中に教室の中には同情の心が、不意に湧き上つた。

父のないAなどは、もう貰ひ泣きをしてゐる。私も卓子によつたまゝ、身體に一ぱい涙の  
流れわたるのを感じて、うなだれてゐた。

教室は水をうつたやうな沈黙の中に、作者のKがす／＼泣いてゐる。

静かな、無言の時間がつゞいた。

しかし、これは何といふ尊い時間であつたらう。

亡き父に泣く作者の姿……。



それを取りまいて、同情に泣いてゐる四十の魂！

實に何等の虚偽もゆるさない眞實そのもののみの輝いてゐる時間だ、私達は暫らく、只無言の中に過した。

私は修身の時間で藤樹先生の孝行談や、儀兵衛の孝行をといたことはあつたが、しかしこれほど親を思ふ眞實さに全教室が動いたことはなかつた。しかるにこの日ははからずも作者の美しい孝心の表現によつて、私自身も子供自身も、この尊い氛圍氣の中にひたるこゝとが出来たのである。

私はやがて、作者の父についての思ひ出を、他の兒童に話して貰ふのだつた。これは作者にとつてはあるいは、迷惑なことであつたかも知れない。でもこの場合、私は、作者の父が知りたかつたのである。作者の親友、松本君はかたりだした。

「僕はK君の家にはよく遊びに行くのでK君のお父さんはよく知つてゐます。」

と云ふ冒頭を置いて、

加賀君のお父さんは毎日、白い服を着て齒の治療をしてゐられたこと。

何時もにこ／＼顔のやさしいお父さんだつたこと。

旅行中、大津の停車場で、不意に病氣になつて、亡くなられたこと。

そんなことを思ひだすまゝに詳しく話してくれるのであつた。

それで私はK君の父の死が普通のものでないことを知り、K君の心持もすつかり分つたのだつた。

みんなは極めて、しめやかに聞き入つてゐた。

これはほんの一例にすぎないが、朗讀會にあつては、實にいろ／＼な材料が次々に多様にあらはれて、その都度教室の氣分をかへて行く、眞實なものに觸れて、教室内がはり切つて緊張するかと思ふと、時にユーモアに満ちた作品に出會して、笑ひに全教室が揺れ動く。春のやうな明るい氣分になつたかと思ふと、秋のやうなしめやかな氣分にかわる。い



うくなものに、こもく觸れて、兒産の魂は磨かれて行く。そこに朗讀會には見のがすことの出来ない高價なものがあると思ふ。

朗讀會は一學級單位でやる場合を本體としたいが、時には全校の朗讀會を開くのも面白いと思ふ。

## 一一 考察吟味を主とする讀方學習

讀本の教材に於て、文藝的教材は鑑賞的取扱を主とすべきものであらうし、理科的教材實用的教材の如きは理解を主とすべきものであらう。勿論これは大ざつばな考へて文藝的教材にも理解が必要であり、理科的教材、實用的教材にも鑑賞が必要であらう、たゞその教材の個性に對して適當に取扱はれることが最もいいことである。これは、前章教材分類の立場を明らかにした時にも述べたところであつた。

これまで掲げた實際的取扱は、どつちかと云へば文藝的教材の指導の方面が多かつたや

うに思ふ。それで、茲では理解を主とする教材の代表として、國語讀本卷十二、「新聞」についての取扱の實際を述べて見たいと思ふ。

### 尋六讀方學習指導案

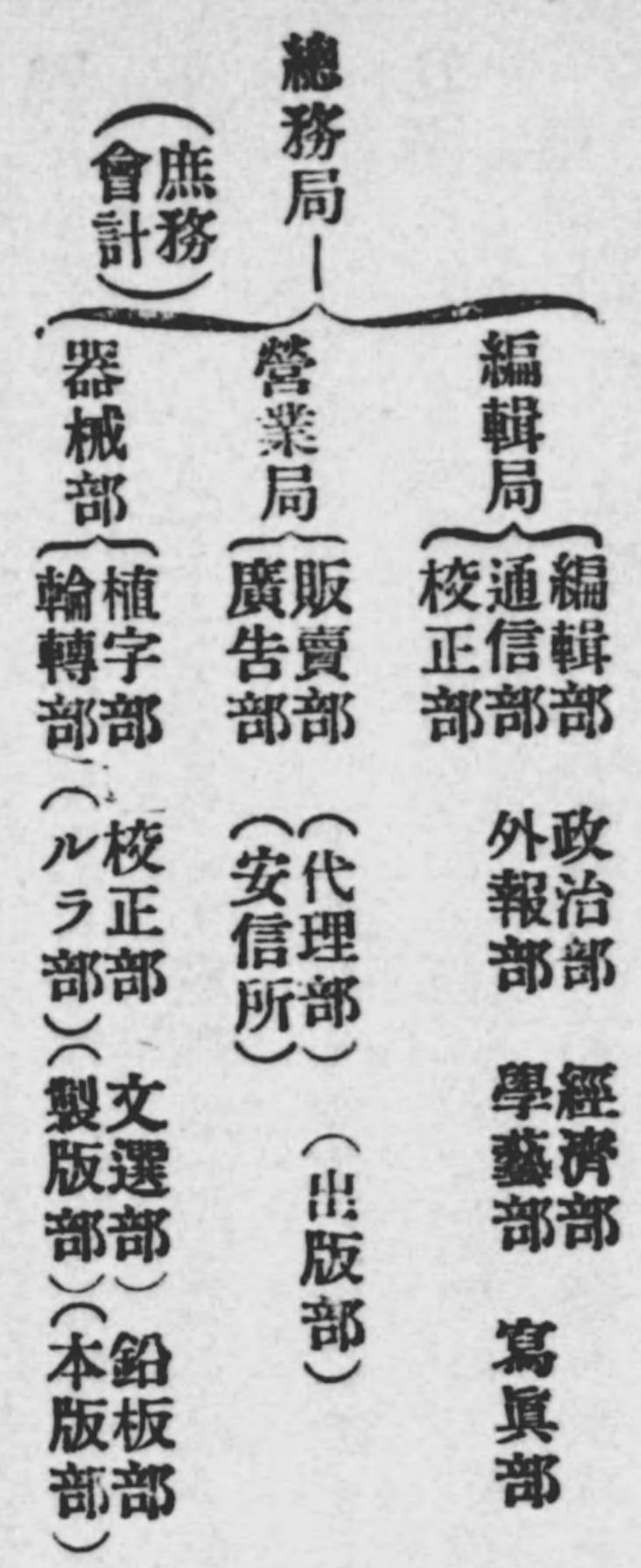
#### 一 教材「新聞」

二 この教材に對する私の考並に研究。

文明の發達に缺くべからざる機關の一つとしての新聞について記述されたものである。國民の常識としても知つて居らなければならぬ知識である。かうした教材は何よりも「理解」さすといふことを主として取扱はねばならぬ。文を理解さす方便として文を解剖することも一つの方法である。本課はその第一段に於て、新聞の起り及び發達を述べ、第二段に我國に於ける現今の新聞を記し第三段に新聞社の組織及び活動を述べて結びとしてゐる。組織については、充分精讀せしめて、全體の系統を表解とさせたい。總務局、編輯局、營業局の文字はあるが器械部の文字が見當らぬので、全文の系統がつかみにくい、再讀三



讀、この組織を系統的に理解させたいと思ふ。大體次のやうになるやうである。



(括弧内のものは参考のために記述したもので、必ずしも兒童に知らす必要はないものである)

この表は讀むことによつて、兒童自らに作成させて討議の上完成せしめなければならぬ。教師がこれを書きうつさせるのでは、何等の價値もないものになつてしまふ。

(通信部) とは内地の通信員からの通信を受取つて原稿を作成する部をさすのである。  
(外報部) とは外國電報など外國方面の記事を掌つてゐる部をさすのである。

(校正部) とは原稿の植字されたものを、一度刷り上げる。それを校正刷といふ。その校正刷によりて誤字脱字を指摘し、活字の差替をなさせる仕事をする係である。この説明には校正刷があれば都合がよい。校正刷はゲラ刷とも云ふ。

(學藝部) 文藝方面學術方面に關する原稿を作成蒐集する。其他講演會など學術に關する仕事は一切この部が掌つてゐる。

(原稿締切時刻) 一定はしないが大ていは午後三時乃至四時である。特殊な出來事のある場合は適宜延ばすことになつてゐる。

### 三 注意事項

- 1 紙型、銅板、活字、校正刷など新聞印刷に使用せられるものを準備すべきこと。
- 2 新聞社を見學すること、特に輪轉機などはよく見させる必要がある。そして讀本の挿繪と比較せしめた。

### 四、學習指導の實際



第一時 読み方、新語句の精査等

第二時 文段の解剖其他

——(第二時の實際)——

教師「今日は「新聞」の文段を調べたり、社の組織など調べたりする筈だつたね。調べがついてゐますか。」

兒童「ハイ、ついてゐます。」

教師「では、その研究に入りませう。初めに誰かに一ぺん読んで貰ひませうか。」

兒童「ハイ讀ませて下さい。」

教師「○○さん！」

兒童一回朗讀する……

教師「さう、よく讀めました。では、文段に分けて見ませう、どういふ風に分けたか。」

兒童「ハイ、僕に云はせて下さい。」

兒童「僕は次のやうに分けました。」

第一段 新聞の發達(初めから十五頁終りまで)

第二段 新聞社の組織(十六頁初めから十八頁七行まで)

第三段 新聞の配布(十八頁八行から終りまで)

教師「○○君の研究でどうですか。」

兒童「私もさう、分けてゐます。」

兒童「大體いいと思ひます。」

教師「では、次には、社の組織について表解をつくつて置かう。大體でもいい。出來上つてゐる人がありますか。」

兒童「ハイ、僕は作つてゐます。」



教師「じゃ、云つてみて下さい。」

児童「(總務局ありて、全體を總べ、編輯營業の二局ありて、編輯に關することは前者之を司どり、販賣廣告に關することは、後者之を擔當す)——とありますから、次のやうに表をつくつてゐます。」(板書する)

児童「僕は印刷部は編輯部とは獨立してゐるやうに、見たいのですが、どうでせう。」

児童「でも、(編輯、營業の二局ありて)としてあるから印刷部はその中の何ちらかにつくと思つて、さうしたのです。讀んで見ると、編輯局と關係が近いやうでその中に入れたのです。」

児童「(編輯營業の二局ありて)とかいてあつても、他に何か別の局があつて悪いことはないと思ふ。僕は、編輯、營業と肩を並べて印刷部を入れたと思ふ。どうでせう。」

教師「さう、この文が少し、あいまに出來てゐるのだね。やつぱり印刷部は、編輯、營業と肩を並べてあるのだね。さうした方が私もよいと思ふね。」

ところで印刷部の内わけはどうなるだらう。營業部は、販賣部と廣告部に分れてゐましたね。」

児童「活字を拾ふて組むところがありません。」

教師「それは何といふ名をつけたらいいでせう。」

児童「植字部ですよ。」

教師「さう。活字を組むことを植字と普通云つてゐるね。それは植字部でいいだらう。そこで(拾ふて之を組み)となつてゐる。拾ふことを文選と云つてゐる。それは文選部と云ふだらう。それから次に何がありますか。」

児童「校正部があります。」

教師「さう。それから?」

児童「(校正終れば紙型をとり)とありますから、紙型部でせう。」

教師「さう、それから?」



児童「更に之をもととして鉛版を造り」とありますから鉛版部でせう。」  
教師「さう。それから？」

児童「印刷機にかく」ですから、印刷部でせう。」

児童「じゃ、印刷部が二つ出来るね。」

児童「編輯部の所でも二つあつたからいいてせう。」

児童「あそこでは編輯局と、編輯部だつたからちがふよ。」

教師「さうだね。印刷部が二つ並ぶと拙いし、普通は輪轉部と云つてゐる。輪轉部として置きませう。まだありますか。」

児童「もうありません。」

(黑板の上には次のやうな表が出来上る。)

編輯局  
編輯部 政治部 經濟部 社會部 通信部  
外報部 學藝部 寫眞部 校正部

總務局  
營業局 販賣部  
廣告部

印刷部 文選部 植字部 紙型部  
鉛版部 輪轉部

教師「さう。これでうまく出来上つたやうですね。では次にもう一つ問題を考へて貰はうか、それは、原稿が出来てから新聞に、刷り上げられるまでの順序を表はして貰ふことだ。本を読みながら、そこで大急ぎで作つて見て下さう。」

(児童、本を読みながら表解をつくる) 三四人は黑板に出て思ひ思ひに、表解をつくる。黑板には次のやうなものが表はれる。

A君

原稿↓文選↓植字↓校正↓(繪)↓紙型↓鉛版↓印刷

B君

原稿↓文選↓植字↓  
繪畫↓(版にする)↓校正↓紙型↓鉛版↓印刷  
寫眞↓



C君

原稿↓文選↓植字↓校正↓紙型↓印刷器械にかける。  
繪畫  
寫真

教師「いろんなのが出来上つたね。さあどれがいいでせう。研究して行かう。先づA君の分から研究を初めよう。」

兒童「繪を校正がすんでから入れるのは、おかしいではないでせうか。」

兒童「僕もさう思ふね。」

兒童「大體繪や寫真は原稿に相當するものだから、B君やC君のやうに原稿と肩を並べて書いた方がいいと思ふね。」

(以下B君C君の批評が出て結局B君のが一番完全だと云ふことになるそれは省略する)  
教師「大體B君が正しいやうですね。ではもう時間も来たやうです。一べん読んで貰つておしまひにしませう。」 兒童朗讀する。

### 第五 小學校に設備すべき圖書

次にかゝげる目録は私の親友竹内熊次君の研究にかゝはるもので、同氏の承諾を得てかゝげる次第である。

#### 修身、歴史之部

國史美談 (上中下)	北垣恭次郎	實業之日本社	各一・五〇
續國史美談 (前後)	同 上	同 上	各一・五〇
趣味の小學國史五年	桂田金造	文教書院	各二・一〇
同 上 六年	同 上	同 上	各二・三〇
小學國史物語 (神代の卷)	菊池勝之助	目黒書店	八〇
同 上 (大和奈良時代の卷)	同 上	同 上	一〇〇
少年日露戰爭史	巖谷小波	博文館	二・五〇
此一戰	水野廣徳	同 上	一・四〇
第三篇 高學年の國語生活學習			



























フランゲイスの大  
 雪中の三ヶ月フェネロン物語  
 クオレ物語  
 子供の聞きながら話  
 童話集  
 魔法棒  
 涙の花  
 るしお童話集  
 お伽旅行世界の果まで  
 世界少年文學名作集 全  
 帝國小年讀本  
 高等 黒綴方模範文例  
 方小 綴方の學園  
 綴り方こどもの劇作  
 優美 兒童文集  
 佳作 幼兒に聞 せるお話  
 小貓の鈴  
 大正少女傑作文

加藤朝鳥譯	家庭讀物刊行會	二・五〇
秋田雨雀譯	同上	二・五〇
前田晃譯	同上	二・五〇
山田枯郷	誠文館	一・二〇
沖野岩三郎	智文社	一・〇〇
田中純譯	支文社	一・八〇
平井晩村	大日本雄辯會	一・一〇
昇曙夢	大倉書店	一・三五
花野園人	富田文陽堂	一・八〇
同	家庭讀物刊行會	二・五〇
久留島武彦	教育研究會	一・三〇
外	明治出版	一・〇〇
久原忠太	株式會社	一・〇〇
稻垣伊之助	山本文友堂	一・九〇
田中萬吉	春陽堂	二・二〇
木村外二氏	文光堂	一・七五
日本幼稚園協會	内田老鶴園	三・八〇
葛原シゲル	文正堂	一・八〇
葛原	同上	一・四五

大正少年傑作文  
 魂の電報  
 都に憶がれて  
 少年少女面白い手紙文  
 世界一屆お伽旅行  
 青い船  
 うねく川  
 海の夢山の夢  
 お伽文學  
 金の輪  
 氣紛れ少年  
 セルピヤお伽噺  
 世界童話たから舟  
 お伽物語天國の方へ  
 野薔薇の約束  
 ハルビンまで  
 不思議の國  
 迷ひ子の家鴨  
 第三篇 高學年の國語生活學習

同	目黒書店	一・四五
北原白秋	アールス	一・九〇
天野藤男	親愛社	一・三〇
山内秋生	春水社	一・五〇
蘆谷蘆村	寶學館	二・二〇
竹久夢二	實業之日本社	一・〇〇
奥野晶子	啓成社	一・六〇
宇野浩二	聚英閣	一・六〇
水田一みづ	寶文館	一・三二
外	南文社	一・五〇
小川未明	博文館	一・三八
竹貫佳水	淺草出版社	一・二〇
井上	中西屋	二・三〇
松本苦味	中野屋	一・八〇
蘆谷蘆村	智文社	一・四〇
吉屋信子	洛陽堂	二・〇〇
大井冷光	日本評論社	二・〇〇
楠山正雄譯	精華書院	二・五〇
鈴木善太郎	文泉堂	一・九〇



























皇太子 陛下御渡歐記念寫真帖 (全)	大阪毎日新聞社	一・二〇〇
兒童の世紀 (月刊雜誌)	大阪毎日新聞社	一・三〇〇
五六年の小學生 (同)	研 究 協 會	一・三五〇
赤い鳥 (同)	赤い鳥社	一・三五〇
小國民新聞 (月三回)	小國民新聞社	一・三〇〇
兒童の友 (月刊)	有文館	一・二五〇
歴史寫真 (同上)	歴史寫真會	一・五〇〇
兒童の綴方 (同上)	培風館	一・二五〇
模範日本地圖	開成館	一・五〇〇
模範世界地圖	同 成 館	一・五〇〇
日本歴史地圖	實文館	一・九五〇
小學國史附圖	同 成 館	一・五〇〇
日本史地圖	目黒書店	一・六〇〇
新式帝國地圖	大日本圖書株式會社	一・六五〇
新式世界地圖	同 成 館	一・八〇〇
日本歴史圖錄	同 成 館	一・九〇〇
小學國史地圖	歴史參考圖書發行會	一・四〇〇
模範白地圖 (全二枚)	開成館	一・〇〇〇
	學海指針社	一・八四〇

全國名所繪葉書  
日本アルプス三十景  
世界一周寫真帖  
陸地測量部地圖

大阪朝日新聞社  
皇室寫真帖  
發行所  
參 謀 本 部

大阪朝日新聞社  
皇室寫真帖  
發行所  
東京三宅坂  
小林又七  
二萬分ノ一  
五萬分ノ一  
三色刷

尙この他、兒童圖書館には郷土讀本、郷土地理、郷土歴史等の讀物をも準備すべきものであると思ふ。



第四篇 子供の生活記録



## 雑 草

### ◇草の上の學校

そこには海のやうな草青い武藏野の原がつゞいてゐます。草原を割つて榛の木の雑木林があります。小さな祠を包んだ杉の森もあります。森や林のかけには青色のルネッサンス式建築や、赤色のゴシック建築や、まだ木の香も新しい文化住宅などが葦美しく點綴されてゐます。

空が美しく晴れ上ると、草の上に大きな飛行船がふんわり知らぬ間に浮んでゐたり、飛行機がプロペラの音勇しく飛んで來たりします。

さうした周圍に包まれた小さな可愛い私の學校――

小さな子供達六十人をいれてゐるマツチ箱のやうな私の學校。



私は或日、校舎の東隣の草原にねころんでゐて、美しいピアノの音がこの校舎から流れて来るのを聞いたとき、私は「草の上の學校」——ふとそんなつかしい感じが湧いて来るのでした。

#### ◇秋 晴

草をしいて私は子供達と仰向になつて寝ころびました。

秋晴の青い空が、無限の空洞を思はせるやうに美しく、そして不思議にうつろつてした。白い綿のやうな雲が、子供達の青い眸にも静かに溶けこんでゐました。

「雲が美しいね。空が青いから。」私は白雲母のやうにきら／＼光つてゐる雲を指して云ひました。見てゐる中にその白い雲は静かに青いガラス張りの蒼穹を動いて行きます。いつまで見てゐても美しい。と、かたはらにゐたN女が不意に、

「草の香がするわよ。」さう申しました。その言葉をきくと、やがて私の嗅覺にもかすかに草の香が甦つて來ました。かすかではあるが春の草のやうに甘い香でした。そのかすかな

甘い香がたまらなく秋の淋しさをこめてゐるやうに思はれました。

そこには一めん芝草が生えてゐました。すぐかたはらには濛い青色の野菊が一株なよ／＼と咲いてゐました。

#### ◇お洗濯ごっこ

雨上りの武蔵野の空にはぼつかり白い雲が浮んでゐます。しめつばい裏の學校園には大根の双葉が寶玉のやうに美しい。コスモスも可愛い蕾をつけたして來ました。

晝食後の静かな氣分を私は階下に下りて見ると、そこには子供達の洗濯屋が開けてゐるのです。バケツに水を汲んで一の組の杉さんや、菊地さんや、山崎さんなどがハンカチにシャボンをつけて洗濯をしてゐる。そのお主婦さんが平田さんなのでした。私がここにこしながらそこに行くのと、

「お客様洗濯ものはございませぬか。」とBさんがいかにも洗濯屋の主婦さんらしい言葉つきで云ひました。



「ああ、丁度よくれたものがあります。じゃ洗つていたときませうか。」さう云つて私は一枚のハンカチを取りだしました。

「どうも毎度ありがたう存じます。」さう云つてSさんはやがてそのハンカチの洗濯にかゝるのでした。洗はれたのは一々丁寧に平田さんが細に吊して干して行きます。

晴れた日の午後

鶏頭の花の目立つて赤い裏の畑！

そこで明るい日光に照らされながら洗濯ものをしてゐる子供達！

そのお主婦さんになつて何か立ち働いてゐる訓導の平田さんの姿！

ここにも平和な此学校の姿を見いだして私は堪らなくなつかしく思ふのでありました。

#### ◇こぼろぎ

A こぼろぎはころころとなくよ。

B さうぢやないよ、こぼろぎはね。

肩させ、裾させ

寒さが来たぞ。

肩させ、裾させ

寒さが来たぞ。

さう云つて鳴くんだよ——

これは子供達が長崎村へ行つた時の會話でありました。

#### ◇屋根の上

子供達が屋根の上に登つて遊ぶことを覚えて来ました。菊地寛作「屋上の狂人」のやうに彼等は屋根の棟をつたひ歩いて何か大聲で叫んだりするのでした。

冷つこい黒瓦の感觸のなつかしさと、高い所から廣やかな草原や森や家などを見下す愉快さを思ふと私は一言の下に禁止してしまふことはどうしても出来ませんでした。私はよく幼い頃土藏の瓦屋根に上つて棟石をまたぎながら村の家々を見下して喜んだ思出を幻に



描いてみました。

その中にこの遊びは益々つものつて来るばかりでした。危険と屋根のいたみ——そんなことも一方考へなければならぬのでした。

或日私は、ずりかゝつた屋根瓦を眺めながら、

「こんなに瓦がすつたんだが、雨が来たら屹度雨もりがするんだらう。」さう心配さうに云ひました。本當に私は心配だつたのです。

すると松田君野口君達が、

「ぢや直してやらう、直してやらう。」

さう云つて、みんな直しにかゝりました。私も屋根に出てなほしました。

直してしまふと、みんなは申合せたやうに教室の中におとなしくはいつて呉れるのでした。

#### ◇ちんからかつた

高い所には子供は本能的にすきなやうです。或る日、立教大學の裏の林に子供達をつれて行きました。すると盛に木登りを初めました。T君は一等高い所にのぼつてゐて高らかな聲でこんな唄をうたつてゐました。自然に出たうたなんです。

ちんからかつた

ちんからかつた

ちんぼこの中に

小ちやな子供が

たくさん居るよ

ちんからかつた

ちんからかつた

高い木の上、高らかな「ちんからかつた」の歌、私は其處に何とも云へぬ晴やかな面白味を感じずには居られませんでした。



## 力草

「これは力草といふ草だよ！」私が云ふと元氣のいい高松君が、  
「力草なら力が強いんだらう。」と云ひだした。そして野口君、高松君、治ちゃん、松田君の四人で青い力草の葉を丁度髪の毛でも捲きつけるやうに、手に捲きつけて抜きかけた。た。

「一二三ウーン。」

しかし草は仲々うまぐん張つてゐて仲々ぬけさうにもない。

「一二三ウーン。」

もう一遍力をこめて引いたがどうしても抜けさうにもありません。

「強情な奴だね。先生手傳つて……」と云ひだしました。

「ちや手傳つてあげよう。」さう云つて私も草に手をかけました。

「一二三！ ウーン。」やつと半株だけぬけました。もう一遍引つばつて、やつと一株の力

草をぬくことが出来ました。

「力草は仲々つよい奴だね。」

ぬけた力草の一株を持つてゐてT君が云ひました。

「しかし人間はそれよりも強いんだ」T君はいかにも優勝者だと云つた態度でさう云ふのでした。

## お掃除

どうした心の経緯だつたかよくは分らない。が、教師が全く干渉しないのに二の組と三の組とが殆ど同時にお掃除をやりだしました。

三の組では或日男女兒が入り雜つて椽側に雑巾がけを初めたのです。跣足になつて井戸水を汲むもの、水を椽に流すもの、たわしで椽板をこするもの……水汲みが「一杯二錢ですよ。」と云ふと、一方では「ハイハイ有難う、大そうお安いですね。」など云つてゐる。仲々にぎやかに、さも面白さうに仕事をしてゐます。風邪でまだ少し顔の色のよくない平田さ



んまでが跣足になつて子供達と一緒に嬉しうに仕事をしてゐます。

二の組では或日、男兒が外の野原で遊んでゐる間に、五人の女兒が内にゐて靜かに掃除をしてゐました。すつかり床板や卓子に雑巾がけをして、椅子や、本棚などきちんと整頓してゐました。その中に外で遊んでゐた男の兒達が歸つて來ました。見かわるまでに室内が綺麗になつてゐるのに、一寸驚いたやうな表情をしましたが、負けぎらいな男子達は、「やーい。こゝがまだきたないや！」など苦情を並べるのでした。しかしきれいなのはやつぱり氣持がよかつたと見えて、その後相談會の折に毎週二回大掃除をしようと云ふことに決めました。

#### ◇帽子と帽章

志垣さんと銀座を歩いた時三越の二階で子供にふさはしいソフトがあつたのでそれを制帽にしたらしいことになりました。それに「太陽と土と芽生」の帽章をつけて子供達が勇ましく登校するやうになるのです。教師までが何だがうれしくて堪らない氣がします。

「茶色のソフト」と「太陽と土と芽生の帽章」

#### ◇おしまひまで仕事をするよ

「村」では九時にベルが鳴る。そして十時半にまた鳴る。九時のベルがなると外で遊んでゐた子供達も大抵ははいつて學習を初める。しかしベルが鳴つても一向かまはないで外で戦争ごっこや土いぢりをやつてゐるときもある。又、ベルの鳴らない半時間も前から學習を初めてゐるものもある。「村」のベルはたゞ時間を知らすにすぎない。

九時から學習を初めて、十時半までやると子供達は疲れる。十時半のベルを聞いて大抵の子供は隣の草原に遊びに出る。晴れた日はお辨常をもつて長崎村の方へ行つたり、立教大學の裏の森に行つたりする。

仕事が眞劍になつて行くと、その外へ出て遊ぶことなんか忘れたやうに仕事をつゞけてゐる。今日は、何時もは遊んでばかり居る小野君が、十時半のベルをきいてゐたが、「僕はおしまひまで仕事をするよ。」さう云つて讀本の書取をやつてゐる。



「僕も……」さう云つて小野君の傍で野口君も書取をやつてゐる。

松田君は地理の本を見てゐる。早川君はメートル尺でいろんなものはかつて、それを一々書きとつてゐる。

私はかうした學習の様子を見てゐると、嬉しさで心が一ぱいになるのであつた。

日課割なんか設けなくて自由にしているこの學校の賜物として生れたよい習はしの一つなんだらう。

#### ◇ばつたの水泳場

他の子供達は草原でバツタを追つて遊んでゐた。雨後の晴れた日だつたので草原のそこに行潦が出来てゐた。その行潦は忽ちバツタの水泳場になるのであつた。

「バツタの水泳場だよ」早川君が草を塗り土をよせて可なり廣いバツタの水泳場をつくつた。それを見て、豊島君あたりも別につくつてゐた。他の子供達はその水泳場が出来るところバツタを捕つて来て、その水の中にはなすのであつた。バツタは水の上を苦しさうに藻掻

き泳いだ。

私はその傍の芝に腰を下して、かうした野性な遊びを眺めてゐた。すると其處に三島君が現はれて私の膝の上にかゝつて来た。三島君は他の子供達の遊んでゐるのを見ながら靜かに云ふのであつた。

「僕はバツタを追ふのはすきだけど、とつていちめるのはきらひ。」

「何故なの？」私は三島君をだつこしながら聞いた。

「だつてバツタの死ぬのも、人間の死ぬのも同じなもの。」

三島君は「お地藏さん」と云はれてゐる程、かうしたやさしい純な心の持主である。

◇か ゆ い!

平田ぬさ子さんが

「先生、かゆい！」と私に背を向けて来た。

「どこ？」と私はその痒いところをきいた。



「いん、いん」一寸手を肩の上からまわして、背のかゆい所をさすのであつた。

「ここですか。」私はぬさ子さんの背に手指をやつてかきかけた。

「もう一寸横よ。」身體を少しひねつて、そのかゆい所に、私の手をいかせた。私はぬさ子さんのかゆい背を人指ゆびの先で搔くのであつた。晴れた日の朝であつた。美しい光が室内に流れ込んでぬさ子さんの横顔を照してゐた。ぬさ子さんはいかにも氣持がいいと云つた様子をしながら、お友達の小鹽さんなどと話をしてゐるのであつた。その中にかゆいところはすつかりよくなつたと見えて、すつと私の所を去つて小鹽さんの所に行つて、その話のつゞきを話し續けるのであつた。

私は「有難う」も何にも云はないで、すうつとあちらに行つた様子がいかにも氣持がよかつたのである。私は口では云へない嬉しさが一杯心に湧き起つて來たので、にこ／＼しながら、子供達の卓子の上の可愛い椅子を下して行くのであつた。私には、椅子を下して行く——といふ單調な仕事までが、其の嬉しさで、何とも云へぬ希望に充ちた仕事となる

のだつた。私はにこ／＼しながらこと／＼椅子を下して行つた。

「何がそんなにうれしいの。」ぬさ子さんは私のにこ／＼顔を振り向いて問ふのであつた。

「何つて、私一人にうれしいことがあるんだもの。」

さう云つて私は次々に可愛い椅子をちろすのであつた。

#### ◇鼻汁

學校から歸つて洋服をぬいで見ると、近頃殆ど毎日のやうに鼻汁がなすりつけられてゐる。それを見ると、私は「又今日もか……」といふ軽い嫌な心が起きて來るのであつた。私は疲れた身體を欄干にもたせながら、刷毛でそのなすりつけられた鼻汁をはきおとさねばならないのであつた。

しかし、刷き落しながら、私は今日一日の子供達との遊び——たのしかつた遊びを思ふと、その嫌な心はすぐに何處かへ消え去つて「もつと鼻汁をなすりつけてくれろ！」さう云ひかけたいやうな氣持になるのであつた。



◇除 草

裏の畑にいつの間にか草がぼう／＼と生え茂つて来ました。或「外の集り」の日、私は「裏の畑の草が大へん生えたから、今日は草とりをやつてくれませんか。」といふと、

「やらう、やらう」と賛成してくれました。皆は思ひ／＼に跣足になつて、畑の中におり立ちました、私も研究生の岩田君も伊美君も跣足になつておりたちました。

草を取つてゐる中に蚯蚓がはひだしたり、油虫が目についたりします、私はそれらについて簡単な話をしながら草をとつてゐます。

こみかん草、ひめむかしよもぎ、ざくろ草、はこべ、ちから草、めひじは、いぬがらしひゆ、にがな……いろんな草が生えてゐます。

「力草は力が強いんだらう。」力草と力くらべをやつてゐるものもあります。

「ざくろ草はまるで柘榴のやうね」とその名の面白さを味つてとつてゐるものもあります。仲々にぎやかです。

その中に子供達はもう、草むしりに飽きてしまつて、水いちりや、土いちりを初めだしました。子供の頃畑に行つて土いちりをした面白さの忘れ得ない私は、子供の遊ぶにまかせてゐました。

渡邊君は、出て来たみ／＼を一所にあつめて、

「これは夏の學校に行くとき、もつて行つて、釣の餌にするのだ。」と云つてゐます。

私がダーウインの蚯蚓の研究をなして蚯蚓は土のうんこをたくさんして、沃土をつくるものだと、話すと子供達は、自分達の畑の中に、飼つてやらうともつて行つて放したりしました。

みんなが可なり疲れてゐると、三の組のミツちゃんのお母さんが入らしつて、

「今日はみなさんが大へん、御はたらきだつたから、お菓子をあげませう」と大きな紙袋に、お菓子を一ぱいもつて来て下さいました。

みんなはそれをよろこんで食べながら井戸ばたで足を洗ひました。



## 追憶の夏

### ◇祖父と莓

私の祖父は跛足のお爺さんでした。

若いころ脚氣のひどいのを病つて跛足になつたのださうです。でも仲々元氣がよくて、毎朝早く起きて草刈に行つてゐました。そのころ既には白い馬と黒い牛とがゐましたが、その飼ひばは殆どこのお爺さんの手によつてあてがはれてゐたのです。

私が眠い眼をこすりながら、床をやつとはなれてゐるころには、杖をついてお爺さんは露にぬれた青草を一ぱい負籠に背負つて山からかへつて來られるのでした。

「みつしげや、今朝はいいものをとつて來てやつたよ。」

「はあ、又いつもの莓かな」

私はそれを聞くなりすぐさま厩に走るのでした。

お爺さんは、負籠をどつかと卸して、露にぬれた青い草の中から露の葉につゝんだものをとり出してくれます。

青い露の葉の中には、ルビーのやうに美しい莓の實があふれるほど包まれてあるのです。莓も露にぬれて光つてゐました。

私はこの露の葉包みをかゝえて家へ走るのでした。

露の葉の中からそのまゝつまみ食べるあの莓の冷たい感觸――

### ◇竹の皮靴

竹藪には青竹がみつしりつんですくく伸びてゐました。夏は竹藪の中にはいるとひやり冷つこい感じがするのです。夏の竹藪の中にはいることは私にはたまらなくすきなことでした。

煮さんとよく竹藪に入つて、竹の皮をひろつたものでした。その竹の皮を厩の前に乾し



ておくと、お祖父さんは、それで皮草履をつくつてくれました。お祖父さんのつくつてくれる草履は、決して器用には出来てゐなかつたが、夏の竹の皮草履が私には氣もちのいいものだったので、私は竹の皮をひろつて皮草履をつくつて貰ふのでした。

勿論、さうした心持の外に、私はたゞ竹藪にはいつて竹の皮を拾ふことが面白かつたのです。時に幅の廣い孟宗竹の皮をひろいあてると、それで竹の皮の靴をつくつてはいたものです。竹の皮靴と云つても、たゞ竹の皮を足にはいて糞すべでくつただけのものです。竹の皮靴を履けば、薄い皮一重で蹠の裏は大地でした。ひんやりとした大地の感觸がたまらなく私にはなつかしいものでした。

私は村の道を、ガサ／＼云はせて歩きました。勿論腰には竹の劔のあつたのは云ふまでもありません。

#### ◇飛魚

夏の夜は濱で飛魚がとれました。

私は兄と提灯をともして、濱に飛魚かひに行つたものです。

暗い海は沖まで静かにつゞいてゐました。その海には黒い飛魚船が見えて、ギイギイと櫓の音がします。

荒神様の祠のところで、兄が、

「オーい、飛魚くれよ——」と云ふと。

「オーい、もう一寸まつとくれよ——」と云ふ。網をあげる水の音がベサリ／＼と鳴る。

濱に下りると白い濱蟹が、灯におどろいて、幾匹も幾匹もすばしこくあちらに走つて行く中にはすばやく圓い砂の穴の中に入りこむものもある。まるで影が動きうつるやうです。兄はその蟹を追つて幾匹もつかまへてくれるのでした。

やがて飛魚船は濱に歸つて来る。船の中にぬれた青い肌の飛魚がまだばくついでゐます。提灯の光で一番大きいのをよつて十匹ばかり籠の中に入れて貰ふのです。飛魚は父と祖父との夜酒のお肴になるのでした。私達もその新しいおさしみをたべて寢床に入るのでした。



### ◇ 浪 乗 せ

毎年夏になると、木料の海は遠浅になるのでした。三町も四町も海の深さは膝までしかない程砂が海底によつてくるのです。

風の吹く日は、その遠浅に浪が立つ。私たちは舟の板子をはずして、その浪の上にのせます。

ざあつと白い浪がくだける。

浅瀬にふんばつてスーと浪の上に板子の上の身體をまかせ、板子の先頭を心持ち押へるやうにしてゐると、浪は軽るやかに氣持よく身體を陸の方へ運んでくれる。浪にぬれた顔を手で一ふきして隣を見ると、五人も六人も同じ浪にのせてゐる。

「やあ——」思はず聲をあげる。浪の動きにちんぼこがブルブルふるへる。見るくうち二町も三町も身體を浪がはこんでくれる。板子が濱の砂の上にすつとのり上げる。又、引きかえして浪にのせる。

浪にのせてつかれると、私達は砂の上に腹ばひして、身體を干すのでした。一夏すると、私達の身體はまるで澁紙のやうに赭くなるのでした。

### ◇ したゞみ

汐のよく干上つた、海の静かな夕方、私達は叔父としたゞみ取りに行つたものでした。したゞみといふのは海の岩の底にゐる小さな圓錐形の貝なんです。それが汐が干上ると岩の上や藻の上に這ひ上つて來ます。そのしたゞみを私達はひろひ取るのです。夕日がきら／＼と輝いて、地藏岬の上にかくれるころ、したゞみは一ばん多く取れます。でもしたゞみは私達が水の中を歩いて行くと、水の中にころ／＼ころげ込んでしまつたりします。私達はしたゞみばかりが目あてなのですが、私達が行くと、やどかりや小蟹があわて、駆けだして岩の裂目にかくれたり、水の中にころげ込んだりします。

あまり面白いので、私達は手先の見えなくなる頃まで、したゞみをひろひます。二升も三升もひろふこともありました。



暗い田の畦道を歸つて行くとき、籠の中のしたゞみは、キュウ／＼と鳴いてゐます。螢があちらこちらにびかり／＼と飛んでゐます。螢を露の葉にとつてかへつたこともありません。

#### ◇夏の海草と動物

鼠の尾にさわるやうな感觸のある青いミル——

青い女の黒髪のやうな管藻——私は澄みきつた海底にそれが揺いでゐるのを見るととき人魚の髪をよく思ひました。

なめくじの這つた跡のやうなめくじした感じと、ぬれた綿にさわる感觸をもつ／＼と、ほんだわらの浮き袋を、一つ一つぶつ／＼と掴み鳴らす面白味——

意地悪の老爺を思はせるしかめ面のおこじ——いつも海にひたつてゐる清さんは、何遍もこのおこじに刺されて苦しんだもの。

澄み切つた海流にのつて氣持よく泳ぎ下る透明な海月の群の流れ——

紫蘇の汁のやうな紫色の墨を溶す海牛の胸のすくやうな香をかぐ朝のすが／＼しさ。  
ペラペラ走る牛の舌鏝の奇異な運動と色彩。

#### ◇うぐひ取り

夏の川も、私達少年を待つてゐました。

雨がはれると私達は學校かえりをよく川により込みました。少し濁つた川の底には香魚やうぐひが銀鱗をひらめかせてゐました。そこは緑の葉かげのやゝ深い川の淵でした。

私達はこの銀鱗の閃めくのを見ると、矢庭に、大石、小石を手あたり次第に川に投げこみます。石は水の中に大きな音を立て、落ち込みます。時には石にぶちあたつてゴツと大きな音を立てることもあります。この恐しい襲撃に魚はみんな岩の下に身をかくすのです。それで石をなげおはると私達は裸體になつて、石の底に手を入れて魚をさぐるのです。一番卑怯な魚はうぐひで人の手が少しさわると、身をすくめてしまふので、やす／＼とつかまれます。私はつかまへたうぐひを口に咬へては、又同じ石の下をさぐります。口に



咬へられたうぐいひはびんくとはねて頬を打ちます。一つの石からうぐひを二匹も三匹もつかまへることはまれではありませんでした。でも鮎は仲々につかまりません。逃げ場のない空洞の中に攻めこんだ場合にはやつとつかまる位です。香魚をつかんだときのあのいい香ひ——まるで指先までがその香魚のにはひで染まるやうな氣がします。

私達は薄の莖にこの獲物をとほしてかえつて行くのでした。

#### ◇づねご

或年、竹に花が咲いて、それに麥の實のやうな實が鈴なりになりました。私達はそれをづねごと云つておりました。藪の竹は勿論山の道ばたの竹にも、そのづねごが鈴なりになつて穂先をたれておりました。

私達は籠をさげてとりに行きました。子供達でも五升も六升もとりました。大人は大きな吠を背負つてづねごとりに奥山に行きました。

「づねごのなる年は凶年だけな」村の人達はさう云ひました。私は何だか恐しいやうな氣

がしました。

或日、私はそのづねごとりに行きました。そして、そのづねごを庭に干しておいて、後に煎つて食べました。香ばしい香はなつかしいものでしたが、しかし口には合ひませんでした。

村の人達は、づねごの粉をお團子にして食べておりました。もさくしたお團子を鶴さんの家で食べたことをおぼへておます。

#### ◇煙草の花

農學校にゐた叔父は、學校から種子をもらつて来て、煙草の栽培をはじめました。初めの年は虫もつかないで、仲々のいい収穫がありました。それで村の畑は次の年は煙草の花で埋まるやうになりました。あの桐の花を思はせるやうな、うす紅い煙草の花がはるくとついでいてゐる彼方にすつきりした大山の姿を見ると、たとへようなき清快さを子供ながら私は感じるのです。



花は好きでしたが、でも葉のあのもち／＼した感じと、異様な香とはいやでした。父はその葉を乾かして、部厚な刻み庖丁でゴック／＼刻んで吸つてゐました。そのごつ／＼云ふ煙草をきざむ音をきくだけでも私は異國的情調を感せずにはゐられませんでした。

嫌だつた煙草を三十越してから、私は又父のやうに嗜むやうになつてしまひました。

#### ◇つゝじの花の味

山には赤いつゝじが咲いてゐました。その葉かげで私達はさるとりいばらの實を投げ合つて戦争ごつこをしてゐました。

「お腹がへつたなあ」つゝじの花は食べられるよ」

私達はつゝじの花をとつて食べました。紙を食べるやうな感じと、舌をさすやうな酸味。私達は花で赤く染まつた舌をペロリと出して笑ひました。

#### ◇野蠶テグス

藪の栗の木に野蠶がたくさんつきました。木の下に行くとその青い野蠶が幾匹もぞろぞ

ろはいまわつてゐました。

或夜、政さんと兄とは、その野蠶をひろつて来てそれを酢の中につけて、腹の中の絲腺を引きのばしてテグスをつくりました。ぬるぬるに固まつてゐる絲腺は引くにしたがつて、する／＼と伸びて行きます。伸べられたテグスはぬれたまゝランプの光にひかつてゐました

空には天の川が白く見えてゐました。冷たい酢の香があたりに漂つてゐました。

#### ◇西 瓜

夏になると「濱の目」から、割木買船が来て海に船りました。船は白い帆をかけた千石船でした。その船は大きな「濱の目西瓜」をつんで来るのでした。その船が来ると、父は屹度西瓜を買つて来てくれるのでした。下の清水につけておいて、日盛に家内中で食べました。西瓜と云ふものを初めて見たのも、この割木船のおかげでした。

毎年、夏になると、私はこの割木船をまつやうになつてゐました。



#### ◇井戸かへ

夏になると一度は井戸かへをしました。

井戸は私の家の土蔵の下にありました。六疊敷もある四角形の井戸でした。水は土蔵の下の洞穴から出て来るのです。水があまり多く出るので、大人が五六人もかゝらなければ汲み干すことは出来ない程でした。水の出る水穴には屹度、鯉がはいつてゐました。

水が澄んで流れでるかと思ふと、やがて濁ります。水の濁るのは中にゐる鯉が動くからでした。

「屹度大きなのが出るせ」

私達は石垣の上から見つめてゐますと、やがて目のあかい鯉がぬる／＼と顔をだします。「それ出た！」

直さんが、水汲桶で受ける。兄が迎へ水をドブンと穴の中に入れ込むと、鯉はその水に押し流されてする／＼と難なくとれる。かくして、毎年三匹の鯉は屹度とれるのでした。

小さいのは、みんな井戸の中に生かしておくのでした。

#### ◇月見草

砂丘には月見草が黄色に咲きました。

そこにはごたく／＼と漁夫の墓石がありました。心中した男女の墓もまじつてゐました。

砂丘が発達するにつれて、墓石は次々に埋つていきました。でも生活に追はれてゐる漁夫達は、墓地なんかにかゝはつて居られぬらしく、墓は荒れるまゝになつてゐました。墓は荒れても月見草のみは毎年々々はびこつて、黄色い花をつけてゐました。

感じやすい少年の私は、夕暮そこに立つて、はるばるつゞいてゐる青い海を、眺めてゐるのでした。いつまでも眺めてゐるのでした。

### 子供の創作

#### ◇手紙

第四篇 子供の生活記録



ボクハ ヤスミニ ナツテカラ マイ日 アサベンキヨウシヲ オヒルカラ アソビマス。  
ヨルハ オスモウ ヲ ミテ ズイブン オモシロウ ゴザイマシタ。モリシタクント  
ボクト オニイサント オヨギニイキマシタ。川ヲ見ルト ドジョウガ ナガレテキマシ  
タ。ソレカラ ダボツリ ヲシマシタ。ダボガ 五ヒキツレマリタ。  
タナゴ モ 一ヒキツレマシタ。マタ トミコチヤン ト ママゴトシマシタ。バケツニ  
一パイ 水ヲ クンデ キテ ドロンコ デ オマンヂユウヤサンヲ シマシタ。ソレカ  
ラカメヲトツテ オモチヤニ シマシタ。  
カメハ シリツポヲ モット、オシツコ ヲ シマシタ。キタナイカラ ニガシテヤツタ  
ラ ウレシサウニ イツテシマイマシタ。サイナラ (二年、高松元治)

### ◇オソラノミチ

オソラノミチハ

クモノナカ  
オヒサマ  
ツロソロ  
ヤツテキタ。(一ネン、ナカムラヤマ)

### ◇日記

七月二十四日 金

朝からとだなへはいつて、おふとんのうへへのつて、あそびました。そうしてもゝをたべ  
ました。

またすこしたつてからとだなにはいつて、おふとんをだしてお山をつくつてその上であそ  
びました。ばんごはんがすんでからたらひにみづをくんでその中にはいつてみづをあびま  
した。



七月二十七日 月

まつばたんが五つさきました。かくれんぼをしました。

ひこうきがとまりました。

そしてはらつばへいつて、たまをころがして、はたとりやあなをほつたり、たまをかくしたりしました。ばんになつてから内になわとびをしてあそびました。(二年、石川進子)

◇ハラ又イタ

ハガイタクテ、ハイシヤヘイッテムシバラヌイテモラツタ。

ヌイタハハ、マンナカガアイテイタ。カミエツツンデ、ツマツテアル。(二年、岸功)

◇ウミ

ケフハウミデアソング。ウミハ、ナミガキテタ。ナミガクルトコニイッタ。オホキナナミガキテモニゲナイデアソングイタ。ソウスルト、ムカフノホウカラフネガキタ。ソオスルトフネハアガロトシタ。ムカフノホオカラオトコノヒトガヘンナモノヲカツイデキテモ、

ワタクシハ、シラナイデアソングイタ。(二年、ゴトウミヨ子)

☒ひめ様と赤い鳥

一 ふしぎな鳥

ある暖い春の日でありました。ごてんのお姫様はいつものとほりあつきをつれてお庭をさんぽしてゐました。するとそこへ赤い鳥がとんで来て「チチックチック」とへんななきごゑをしてとんで行きました。おひめ様は、一目その鳥をみてもうそのとりがほしくなりました。

二 相 談

おひめ様はけらいの者を集めて「お前たちの中間で、ゆうきのある者はその赤い鳥をさがしておいでほしい物はのぞみしたいあげるから」といひました。するとそこへ、ハンスと、エスナといふ二人のけらいがすすみ出て「はい私たちがきつといつて、とつてきます



から」と、いつて「のぞみはてつぼうとそのぼうしをかぶるとじぶんのすがたがかけられる  
というぼうしを下さい」といひました。おひめ様はすぐその品をおわたしになりました。

### 三 ふしぎなけだもの

さてハンスは南エスナは西にわかれて旅に出かけた。それで、エスナの方から話しま  
せう。エスナは西へくるとあるいて、行くと一つの大きな森に來た。そして中へすこし行  
くと、もう日はとつぶりくれてまつくらやみになつてしまいました。

こまつてゐますと、そこへ、さると、犬と、きつねがやつてきて、「さるがきやんく  
く」となきながら、「こつちく」といふやうにひつばつて行くので行つてみると、こや  
があつて、「とんく」とたたくとおばあさんがもうさつきからまつてゐたやうに、「さあ  
らつしやい」と中へとほすともうおもしろいさうなごちそうができてゐました。おばあさんは  
「さあゆつくりたべて、ねな、あすになつたらみちをおしへてやるから」とやさしくいつ  
たのであんしんして、うんとたべて、ぐつすりねこんでしまいました。

### 四 赤い鳥をみつけた

あくる朝おばあさんに道をおしへてもらつて、れいをいつて行くと、「チチックチック」  
といふ赤い鳥のこゑがきこえたので、木や草をわけて、よくみるとたしかに松の木のでつ  
べんに、とまつてゐるのでねらいをさだめて一ぱつうたうとすると、だが少しかんがへた。  
「さてよあの鳥をころして、おひめ様の所へもつていつたのでは、つまらないな！」と思  
つてすぐ、すがたのかくれるぼうしをかぶつてうまくつかまへました。そして、鳥かごが  
ないので、おばあさんの家からもそうはなれてゐないので、急いでいつて鳥かごをもらつ  
て、その中へ赤い鳥をいれてすこしゆくと小さな町についた。

### 五 めぐり合ひ

エスナはあるやどにとまつた。となりの人をよくみると、なんだかハンスのやうな氣が  
したので思ひきつて「ハンス君く」とよぶと、こちらを、むいたのはハンスであつた。  
「あエスナ君それで赤い鳥は！」エスナ「みつけたよ」ハンス「君はよつぽどうんしやだ



よ、では僕の話をしよう。」

## 六 ハンスの話

ハンス「さて僕は南へくと、すすんでいくと一つの町へついた。僕はどこかにやどがないかと、あちらこちら、さがしていると一人のあやしい男があとをついてくるんだよ。エスナ「ふんそれから」ハンス「僕はきびがわるくなつたから、すぐすがたのかくれる、ぼうしをかぶつて、一つのやどをもとめた。そしてこんどはあくる朝、すこし行くと、森についてあちらこちら、さがしても赤い鳥はゐないのでがっかりして、このやどへ来たんだよ。」エスナ「そうかい、君はよつぽどうんがわるいね」

## 七 わるだくみ

その夜エスナのおくねてゐるのをみたハンスは、かたてに、たんとうをもち、エスナをころして、赤い鳥をとつてにげた。

## 八 うそはあらはれる

やどからにげたしたハンスは赤い鳥をもつて王様のごてんにきておひめ様にむかつて、ハンス「どうです、このとおり赤い鳥をとつて来ました。あのエスナのやらうなんかは、きつと死んだにちがいありません。」そのとき赤い鳥がこんな歌をうたひました。

赤い鳥「チチツクチツクうそのきハンス

エスナをころして

エスナのとつた赤い鳥をもつて

にげたじたんだ。私はほんどに見ていたよ。」

これをきいて、王様も、おひめさまも大そうおこつて、すぐハンスを、ろうやに入れ、エスナには、大きなはかをたつてやりました。うそはなか／＼わるいことです。「うそつきはどろぼうのはじまり」と皆が言ひます。(四年武井澄雄)

## ◇ふ う せん

ふうせんふうせん



どこにいく

わたしはそらにとんでゆく

ふうせんふうせん

おまへはりこうか

りこうなら

あまの川からみずくんでこい

(三年 野口 周二)

### ◇ながそてのきもの

今日はおまつりだったから、ながそてのきものをきました。それからあつちにかうとしたら、よその人にやぶかれました。(二年 平田めさ子)

### ◇手紙

みねじ先生ごきげんよろしいかばくもあいかはらずべんきようをやつたりあそんだりしてゐます。そして母さんが今年の夏はけいおうにういんしてしじゆつをやりました。も

う母さんはおうちにかへつていらつしやいます。ですからどこにもゆかれません。たくさん虫をとりましたよ。(二年 増戸 太郎)

## 九十九里濱の夏の生活

### □栗山川

私はふと幼い頃のことを思ひだして、ざわ／＼と舷に觸れた芦の葉ををりとつた。そして、それを手指の間に狭んで蘆笛を吹き初めるのであつた。幼いころ學校歸りによく吹いた蘆笛は三十すぎてもやはり鳴るのだつた。ピーピーピー蘆笛はゆるやかな川の水の上を流れては消えた。いつか久布白君や野村訓導もこの蘆笛を吹き初めるのだつた。

兩岸は蘆と眞菰でびつしり詰まつてゐる。青い蘆の間から、蘆切がグイグイと鳴いてゐる。赤い萱草の花が水の上にさし出て咲いてゐた。

「おや浪の音がしてゐる。」不意に野口君が耳をそばだてた。たしかに九十九里の浪の音



だ。

ドー　ドー　ドー

風の音のやうな、それてゐて地の底から聞えて来るやうな力強い音響だ。

まだ海岸までには二里以上はあるさうだ。私はあの空が崩れて来るかと思はれる、九十  
九里の白浪を思ふのだつた。

兩岸の蘆間では釣をしてゐる人が幾人もゐる。古い麥稈帽子をかぶつて、煙草を吹かし  
てゐる。

「小父さん、つれたかい？」子供達が叫ぶ。聲をかけると、彼等は屹度何か愛嬌のいゝ挨拶  
をする。手長蝦をブイと投げてくれたり、鯰を投げてくれたりする。中村君が胴藍を水  
槽にしようと思ひだし、すぐそれに水を入れて速製の水槽が出来る。鯰が長い鬚を鷹揚に  
ふつてその水槽の中をふらりと泳いでゐる。皆は喜んでそれを眺める。

この邊で釣つてゐるのは、鰯の子のいなといふ魚だ。餌は蚯蚓ださうだが、終りになる

と、餌はなくとも、釣針に餌の香が残ると、餌のない釣針に喰ひついて来るさうだ。成程  
見てゐる中に銀鱗が釣り上げられる。船の中では拍手喝采の喜び……

船足はぬるい。二里半ばかりの水路を四時間もかゝりさうだ。満潮時だからだといふ。

印半纏の船頭さんが、力をこめて水棹をさすが仲々はかどらない。

なるほど、この邊でも川水が鹹い……

空が暗くなつたかと思ふと、霧雨が来る。又晴れる。雨にぬれた舟の大旗がぱた／＼と  
はためく。

長くつゞく砂丘に、ほのかな夕闇の迫つてくるころ、私達はやつと、蓮沼村の夏の學校  
の宿舎に雨にぬれてつくことが出来た。

#### □村の新聞

その夜、皆は疲れて早く眠つた。私と伊美君とは子供達の小さな軀を聞きながら「村の  
新聞」をつくるのであつた。



五分心ランプが暗くジジと鳴つてゐる。その下で私が發刊の辭を口で云ふ。伊美君がそれを謄寫版の原紙にがりく〜と書いて行く。

○  
九十九里にまの夏の學校が開かれるについて、この「村の新聞」が生まれました。おもしろいことならなとつさりのせませす。愛讀して下さい。みなさんのうちからも、どしどしおもしろいことがらを投書して下さい。よろこんでのせませす。

第一號の朝刊にはこの外「夏の學校への出發」「すこしづつ」「むしろの帆」「どうらんの水槽」「千葉驛でのしくじり」「伊美先生のどごえもん」等がのり尙附録として、志垣さんの作品がのつて、夏の學校の第二日——皆の目のさめたころには各の子供に手渡しされたのだつた。

□手 長 え び

「おぢさん、つれるの——」。

「つれるよ。」

「みせてくれ。」

あしの中にうづくまつてゐたひげむしやのおぢさんは水の中から、ザルを覗きあげてみせる。中には白いのが

ピク〜ひかつてる。

「一つくれない。」

「一つおくれよ。」

おじさんはだまつて、ザルの中に手を入れてから、

「ほうれ。」

と舟をあげてなげる。舟の中ではみんなが立ち上つてよろこぶ。

ばさりと音がしておちたのは、めづらしい手ながえびだ。

「サンキユ おぢさん。」

「ありがたう ありがたう。」

△燕 の 子

あしの小えだに

五ひきならんだ燕の子

ほらごらん

みなしてこつちをみてる

あの小さい眼

灰色のきもの

小えだはゆらゆら

船はすいすい。

△草ぶきのやれ

第四篇 子供の生活記



草がはえてる  
貝がのつかつてゐる  
草やね  
小やね

皆は顔もあらはなひ珍しい「村の新聞」をよんでゐた。

### □しじみ取り

第二日、雨が降つても子供達は濱へ出て水を浴びたりした。子供達の喜びは逆も大したものだ。蟹を捕る。釣を初める。寫生をする。砂遊びをする……

午後、濱邊に出て見ると、潮が干上つてゐた。昨晚まで水がなみくと湛へられてゐた栗山川の川床は露にはあらはれてゐる。三島君、福澤君、高垣君、武井君などと河にはいつて見ると、澤山のしじみがゐる。すぐみんなにそのことを福澤君がしらせる。やがてバケツやら網袋やらをもつて皆がぞろぞろ出かけてくる。二三十分間の中に三四升もとれたらう。

あつちでもこつちでも、裸の男がしじみを取つてゐる。長柄の大きな熊手にあみ袋をつけて、それに腰繩をつけて砂の中を鋤いて行く。砂は袋の網目をくゞつて落ちて行くが、しじみのみは網袋の中に残るのである。

長柄の熊手を手にして、腰を左右に振りながら真裸の小父さんが、あつちでも、こつちでもすいてゐる。その姿にはユーモアがあり、又いかにも悠長でいゝ。

### □日が出た

こゝへ来てから  
初めての  
お日様だ  
おがめ—  
おがめ—  
おがめ—

私のすぐ側の白い敷布の小さなお蒲團にやすんでゐた小野君は、むつくと起き上つたかと思ふと、かう張り切つた聲で、蚊帳の中から叫んだ。

外では白い朝の光がさんらんと照り光つてゐる。あゝ幸福な明るい天気よ——



□小鳥の鳴き聲

この邊にはいろんな小禽がある。まだ小暗い中から鳴いてゐる。こよしきりがの蘆間をくゞつて鳴いてゐる。頬白もある、雀か唐黍の葉尖にとまつて夏の學校を覗き込んで鳴く。野村君と二人で小禽の鳴き聲を考へてゐる。

こよしきり ヒイ ヒイ ヒイ ヒイ

ジョ ジョ ジョ ジョ

よしきり グイ グイ グイ グイ

いそちどり ビヨ ビヨ ビヨ ビヨ

この鳥の鳴き聲を、この濱からとり去つたら、どれほど淋しくなるだらう。

□蟹

平家蟹は川べりの蘆の根元で、夕潮の充ちて來るところ、ぶつくと靜かに泡をふいてゐる。濱がには白い砂の中に丸い穴をほつて、その中にかくれてゐる。沙が引くと、穴口

に出でゐて、可愛い小さな砂の團子をつくつてゐる。親爪で砂を口にかきこんで、口で丸めて、それを又親爪で器用にころつと前にころがす。面白くて、いつまでも見てゐたくなる。

しほまねきは潮干の濱で、親爪をグイグイ動かして潮を招いてゐる。

◇蟹のお店

はま蟹

お店をだしてゐた

砂のお團子うつてゐた

一ついくらと問ふたれば

團子はほつて

にげちやつた。

□花 火

濱邊の夕方はよかつた。

「あれ 先生 象のやうな雲が出てゐる。」



「熊のやうにも見えるよ。」

夕飯を食べながら、箸をもつたまゝ縁側に皆が立つたりした。  
夕風が唐黍の葉に鳴つた。

◇夕 方

お空に青い雲が出たよ

とうきびの畑の上に

ぼくらのおうちのまーへ

あーをいくもてーたよ。

お空にくりい雲でたよ

とうきびの畑のよこへ

澤山ならんだ松の上

しろいくもてーたよ。(専三 福澤昇八郎)

暗くなると、皆は東京からもつて来たいろんな花火を上げた。流星とか五色玉とかいろんな名のついたものだった。

前の草原でパン／＼景氣のいゝ音がする。夕風が唐黍の葉末にさら／＼と鳴る。

田舎の子供がぞよ／＼よつて来る

シユーと青い酒のやうに澄んだ夜空に高く／＼赤い花火が上つて、パンとはぢける。

◇は な び

ぼくが花火をあげてゐたら

いなかの子供が

ばん／＼いつたので

しりもちをついた。(専四 高垣弘)

□竹 笛

何處から貰つて来たのか、子供が青い若竹をとつて来て、縁側で手工を初めた。若竹は切出で削ればかり／＼と鳴つて極めて氣持よく切れる。

私は少年の頃作った横笛をつくつて鳴らすと、子供達は珍らしがつて「僕にも」「僕にも」とせがみ初める。私は何本も何本も若竹の笛をつくつた。子供達はよろこんで縁側に足をぶら下げてゐて吹いてゐた。

高田君や、松末君は豚の鳴き聲のやうな異様な笛をつくつてぶら／＼ふいてゐた。



□ 反対づけ

子供達は輪座をつくつて、いろんな遊びをする。トランプをやつてるものもある。地雷工兵をやつてるものもある。蟹や魚の研究をやつてるものもある。

或日、反対づけをやつてゐた。

「タカタの反対はやつぱりタカタ。」だよと野口君が高田君に云ふ。

「イタリヤの反対はヤリタイになるよ。」とチリスミト(地理好き)のニツクネームをもつた中村君が次ぐ

「杉君の反対はギスだ。」

「道理で杉君はギスのやうにやせてゐる。」

「シカはカシとなるね。」

「イタイの反対はやつぱりイタイだ。」

「タケヤガヤケタはやつぱりタケヤガヤケタになつてるよ。」(タケヤといふのは池袋の文

房具店です)

「ヤオヤもヤオヤだ。」

「久布白君、ロシブクとなるね。」

「シロフグとなればおもしろいにね。」

仲々にぎやかにやつてゐる。

□ 鯛を拾ふ

川で水を浴びてゐた福澤君が長さ八寸ばかりの鯛をひろつて来る。まだ死んで間もない鯛らしい。腹をざうり蟲に喰はれてゐる。上げ潮に乗つて川に上つて来たのであらう。

□ 夢物語

朝一とき蚊帳の中で夢物語がはび。

「動物園に行つたんだよ。河馬の所に行つて見てゐたね。ところが河馬が俺のお尻を、ぐんぐん押してるのさ。」



「こいつ」といつて、俺が河馬のお尻を押したら、それはデブさん(早川君)だったのさ……」早川君は本當に河馬のやうに大きく肥つてゐる。

皆はおかしさにハハハと笑つた。一時に目のさめたやうな氣がした。でも、寢坊クラブ員はグーグー軒をたて、寢てゐた。寢坊クラブの隊長は〇〇先生だった。

#### □貝 笛

昨日お風呂かへりに貝殻を貰つて來てゐたので、朝食前に、小野君、高垣君等とそれを砥石にかけて貝笛をつくつた。

穴のあいたところから吹くと、貝笛はふう〜と鳴つた。「君が代」でも「靴が鳴る」でも何でも吹けた。

小野君や久布白君は夕方、風呂に行くときその貝笛で「靴が鳴る」を吹いてゐた。

#### □お父さん

一年の和子さんは、いつとはなしに、私に

「お父さん」と呼びだしてゐました。

「お父さんおんぶして……」などと海水浴に出るとき、私の背中にのつかつたりしました。

「お父さん、お乳のむ」さう云つて私の胸をはたけたりすることもありました。

みんなも「峯地和子さん」と云つてゐました。

#### □化物ごっこ

その和子さんと、或夜「化物ごっこ」をしました、小野君たちもゐたと思ひます。

私「赤い帽子のお化の子、

月夜の木蔭からやつて來た。

お化の頭は何じやいな」

和子「お化の頭は鯨だぞー」

私「お化の足はなんぢやいな。」



和子「足には鷗が百羽ゐるぞ！」

私「お化の着物は何ぢやいな？」

和子「青い魚の鱗だよ。」

私「しめてる帯は何じやいな？」

和子「大きな長い蛇だよ。」

私「あやおや、こわいお化だな……わ——」

と私が逃げると、和子さんのお化が私を追ひまはす。一しきり前の草原で私は追ひまは  
されました。

空ではお月さんが笑つて見ていらつしやいました。

#### □九十九里の歌

唐黍の葉ゆれの月にひとりゐて病む吾兒おもひ貝笛を吹く

x

夕づゝにうみほゝづきを吹きてある兒等見てあれば吾兒の思ほゆ

x

夕汐のみちくるけはひ青蘆の根元に蟹の泡ふける見ゆ

#### □地 引 綱

「明日は風ぐから地引があるだつべ」

炊事のお爺さんがさう言つて家へかえつた。

「それでは明日は早起デーにしよう。」と云ふことになつた。寢坊クラブの連中は真先にな  
つて蚊帳の中にもぐり込んだ。

まだ暗い中だつた。前の道を、

「うおう、うおう………」と地引のあることを知らせて歩く男があつた。私は寢床の中で  
いよゝ／＼地引があるなど思つて、尙うつらく／＼してゐた。その中に濱の方で盤木の音がカ  
／＼と高く響きだした。